

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Space Structure of the Mbuum Society, North Cameroon

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日野, 舜也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003641

北カメルーン・ブーム社会の空間構造

日 野 舜 也*

- | | |
|---------------------|-----------------|
| 1. はじめに | 4. ハングブーム村の空間配置 |
| 2. ブーム社会全体の空間構造 | 1) 村全体の配置 |
| 1) ブームの国土とその変容 | 2) 民族分布 |
| 2) 地域の基層文化としてのブーム文化 | 3) 村の社会組織からみた配置 |
| 3. ハングブーム村周辺地域の空間配置 | 4) 親族組織からみた配置 |
| 1) 位置, 自然環境 | 5) モスクをめぐる空間配置 |
| 2) 行政区画 | 6) 市場をめぐる空間配置 |
| 3) 民族分布 | 7) 教育をめぐる空間配置 |
| 4) 商業圏 | 5. キラの空間配置 |
| 5) 社会交流圏 | 1) キラの基本的構造 |
| 6) 通婚圏 | 2) 女のばしょ |
| 7) 就職圏 | 3) ベラカのキラ |
| 8) 生業圏 | 4) キラの構成メンバー |
| 9) 生活圏 | 5) キラ内のその他の施設 |
| 10) 宗教儀礼, 通過儀礼など | 6. さいごに |
| 11) ブームの空間意識 | |

1. はじめに

この小論の目的は、北部カメルーン・ブーム (Mbûm) 社会の民族誌の一部として、かれらの住居生活をとりあげることにあるが、その記述の方法として、特定の時点、すなわち、基本的には、1970年2月～3月の時点において、筆者が参与調査をおこなっていた、人口433人のバングブーム (Mbang Mboum) 村における空間構造を、できるだけ細大もらさずに記載しようとするものである。バングブーム村において、筆者は、1969年11月～70年3月、1971年11月～72年3月、さらにその後、1974年、1976年、1980年、1982年、1986年の短期の追跡と補足の調査と、7回にわたる参与調

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

査を継続しているが¹⁾、第1回の調査にさいしては、村の人口の把握（世帯簿、人口移動の基礎台帳の作成）、村の内外の空間配置、衣および食についての民族誌、生業とくに農業サイクルと市場をめぐる諸問題、ブーム語の習得などをおもな調査項目として、基礎的資料の収集につとめた。その成果の一部は、すでに、語彙集（民族誌記述をふくむ）として刊行されている [HINO 1978]。

空間配置については、1969年12月、富川隊長と共同で、主要住宅の計測をふくむ調査をおこない、その成果の一部はすでに報告されている [富川 1971: 276-278]。さらにその後、村全体の住居配置、村と畑の配置、市場をめぐる空間配置などの調査をおこなったものである。

2. ブーム社会全体の空間構造

1) ブームの国土とその変容

ブーム社会は、伝統的な聖なる王であるベラカ (*bélakà*) を中心にする村落連合国家をつくりあげた²⁾。すなわち、かれらの口頭伝承によって同一の始祖からでたとされる5人のベラカが、それぞれ固有の領土 (*njál gàngfè*) を保有し、ベラカのすむ首邑 (*fá lúkú* あるいは *fá húnàké*) と、周囲数十キロに散在する数十の小村落 (*fá njiki*) とがそれにふくまれ、首邑はベラカの代がかわるごとに、村落は焼畑耕作の継起にしたがって、領土内での移動をくりかえしていたとみられる³⁾。

その領域は、カメルーン共和国中央部を東西に横切るアダマワ高原のほぼ中央部、北は北緯8度、南は北緯5.5度、東は東経15.5度、西は東経13度あたりにひろがって

1) 本調査は、文部省科学研究費補助金（海外学術調査）による、「アフリカ部族社会の比較調査」（研究代表者：富川盛道（1969, 1971）、日野舜也（1974, 1976））、「スーダンサーヘル地帯における移住と地域形成の調査研究」（研究代表者：富川盛道 1982）、「アフリカにおける都市化の総合比較調査」（研究代表者：日野舜也 1986）および、1979年度の国際交流基金学者芸術家等長期派遣計画によっている。文部省、国際交流基金、カメルーン国立人文科学研究 所 (ISH)、富川盛道隊長、ISH 北方研究センター長 Eldridge MOHAMMADOU 氏、その他の関係各位に謝意を呈するものである。

2) 国家という概念を、筆者は、こゝでは明確な領土の存在、そこにおける住民の合意、統合の基礎になる統治の組織という三つの要素において、ブーム社会には妥当するとかんがえる。そして、統治の頂点にある複数のベラカの併存、数十の小村落を領土内にもち、かつ、ギリシャやローマの都市国家、ハウサやヨルバの都市連合国家などを念頭においた場合に、都市というよりは村落というにふさわしい首邑の規模、などを顧慮して、こゝでは、ブーム社会を村落連合国家と定義したのである。

3) ブームの歴史については、筆者自身が、バングブームの現在のベラカ・アバカルより聴取した資料にもとづいている。同時に、モハンマドゥ等の論文 [MOHAMMADOU 1978, 1986; FARAUT 1973; FROELICH 1981; STRUEPELL & von BRIESEN 1980] を参照している。くわしくは、日野参照 [日野 1987: B]。

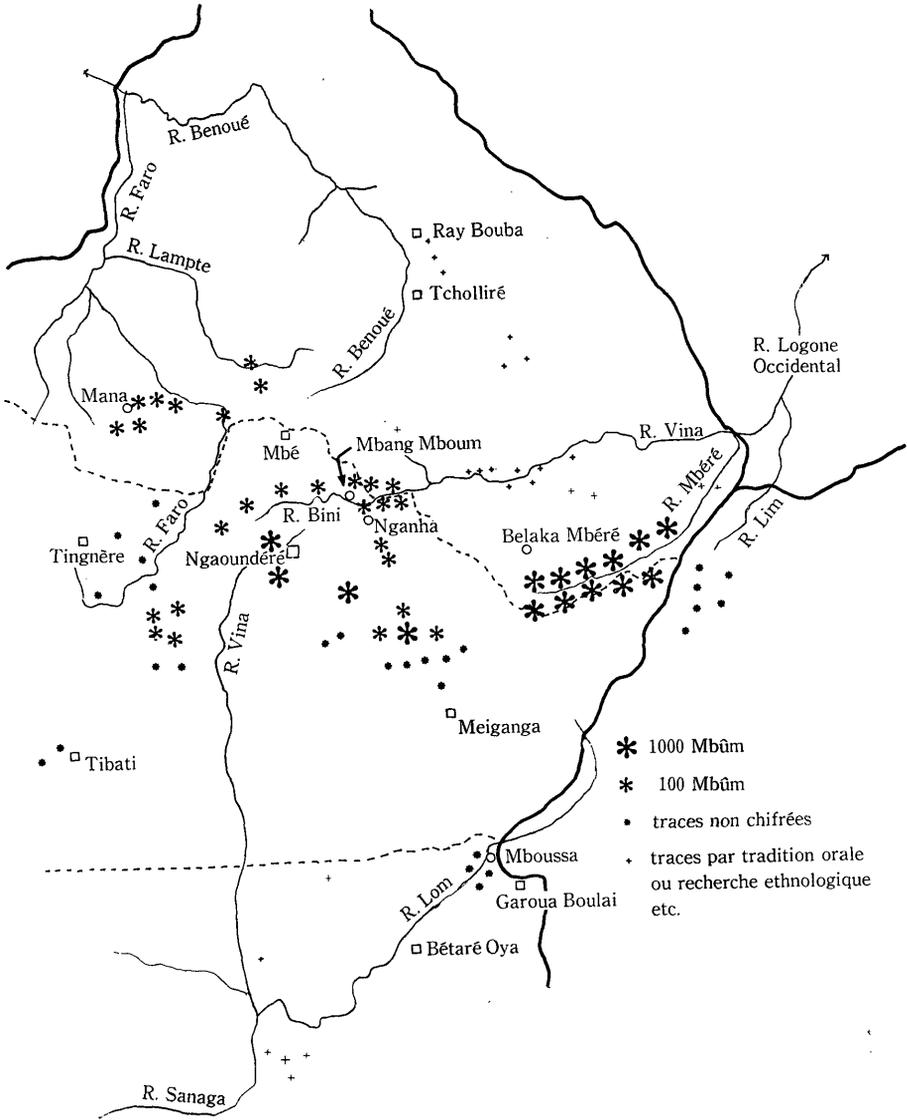


図1 ブームの人口分布

いる。つまり、北はアダマワ高原を北へおりたベヌエ川源流部、南はアダマワ高原を南へおりたサナガ川源流部、東は中央アフリカ共和国西北部、西はナイジェリア共和国との国境に近いベヌエの支流ファロ川流域部におよんでいる（図1）。

さいしょにブームの王権をにぎったとされるベラカ ニヤサラブーム (Bélakà Nyààsàràmbùm) が、その3人の兄に、「ベーレ (Mbèrè) よ、おまえは東へ15日旅をしてそこに都をつくれ。ブーサ (Mbùsà) よ、おまえは南へ15日旅をしてそこに都

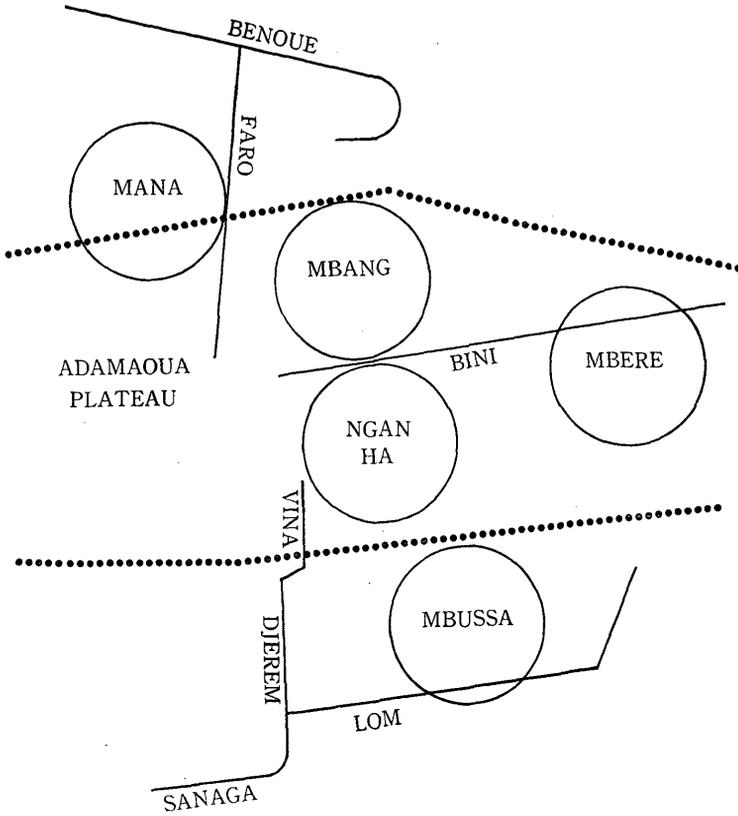


図2 ブーム社会の空間配置概念図

をつくれ。マナ (Mànà) よ、おまえは西へ15日旅をしてそこに都をつくれ。」と命じたという伝承⁴⁾のように、ニヤサラブームの双生児の男子ハジェレ (Hájèlè) と、ハジェレ (Hájélé) が、ヴィナ川の支流ビニ川の北と南にわかれてつくったバングブーム (Mbang Mboum)⁵⁾ とガンハ (Nganha) の二つの首邑とその領土をまんなかに、東方のベレ (Belaka Mberé), 南方のブーサ (Mboussa), 西方のマナ (Mana) というように、ブーム社会全体の空間配置が、秩序だった形でありたっている (図2)。

かつて、それぞれのベラカには、呪力と呪薬による競合の関係 (*sáfi ràùrù*) にあり、その接触は一方の死を結果するという信仰をつうじて、相互の領土の不可侵性が保持されてきたとみることができる。

4) ニヤサラブームが、三人の兄に命をくださったのは、現在のガウन्दレ郡の北東部、ガウダムジ (Ngaoudamdji) の丘の上であるとされる。

5) 以下、地名は、現在のカメルーン共和国におけるフランス語表記のものにしたがう。またブーム語については音調記号をつけた。フルベ語、ハウサ語、アラビア語などの人名、イスラムにかかわるタームは記号をはぶいてある。

かれらの起源伝承によれば、かれらのさいしょの祖先が天からおりてきた場所は、アラビア半島のイエメンであり、ナイルをわたって⁶⁾、チャド湖、ナイジェリア東部のジュクン (Jukun) の土地、東へもどってチャド湖南部、そこから南下してチャド西南部のラカ (Laka) の土地を経て、アダマワへ到達したのだという。したがって、ブームの人びとは、ジュクンとの親近性をよく口にすし、東方のラカの土地をかれらの故地とする意識もつよい⁷⁾。ラカの土地はヴィナ川 (Vina) の下流部にあたり、そこからヴィナ川に沿ってアダマワにのぼってきたのだという⁸⁾。

ブームの到来以前、このアダマワの土地には、背の小さな民族ガンジュリ (Gang-djoulli)、耳に大きな切りこみを入れるのを習慣とした民族ニャサイ (Nyassay) がいたが消滅してしまったといわれる⁹⁾。アダマワ高原中央部のブームの周囲には、東のビニ川 (Bini) 下流のラカ、北のベヌエ川 (Benoue) 源流平原部のドゥル (Duru)、北西のファロ川 (Faro)、西方のクティン (Kutin)、西のティニユレ (Tignere)、西方のニャムニャム (Niamniam)、南西のバンニョ郡のワワ (Wawa)、マンビラ (Mambila)、南のティバティ郡南部のヴテ (Vute)、南および南東のメイガンガ郡のバヤ (Gbaya) などの諸民族が分布している (図3)。

ブーム社会においては、ブームはヴィナ川上流のブームゲル (Mbum Ngêr, 上の Mbûm)、下流のブームティバ (Mbûm Tibà, 下の Mbûm)、その南がわ、アダマワ高原部南部のブームババル (Mbûm Bâbâl, 平地の Mbûm) に三分されるとする。ブームティバは、よりラカにちかい習慣をもち、ことばも方言差があるといわれる¹⁰⁾。バングブームは、ガンハ (Nganha) とともに、ブームゲルにぞくする。

バングブームにおける伝承によれば、25代目のベラカ・ガンマンジュク (Bélakà

6) バングブームのベラカの話では、祖先がイエメンの土地へ、天からはしごをつたっておりてきたところ、下にはイスラム教徒がいたので、それをきらって天へもどろうとした。しかし、はしごが長く、もどるまえに、シロアリが根元をたべてしまい、はしごは西へたおれて、チャド湖の南方にほうりだされたのだという。

7) この部分はミークの所説によるところが多い [MEEK 1931, 1933]。

8) 一方、ブームには、その西方、西カメルーンのカメルーン高地のティカール (Tikar) の人びとが、もともと、ブーム (Mbûm) からわかれて西へ移動したという伝承があり、ティカール・ヴテ (Vute) との親近性を口にす。

9) シュトルンペルとブリーゼン [STRUEMPPEL & von BRIESEN 1980: 129-131]。また、バングブームのベラカ・アバカルによれば、ガンジュリの人びとは、背がひくく、いつも大きなパイプでタバコをくゆらせていたという。ガンジュリもニャサイもともにどこかへ移住、あるいは、ブームに吸牧されてしまったとみられる。

10) 筆者が、ガウンデレで出会ったブーム・ティバ (Mbûm Tibà, チャド出身) のインフォマントは、ことばがちがう例として、数詞のちがいを指摘した。カメルーン国立人文科学研究所であつめられた基礎語彙調査票でもブーム・ティバ、あるいはベレという方言の一つにあつかわれているが、成果は未刊である。

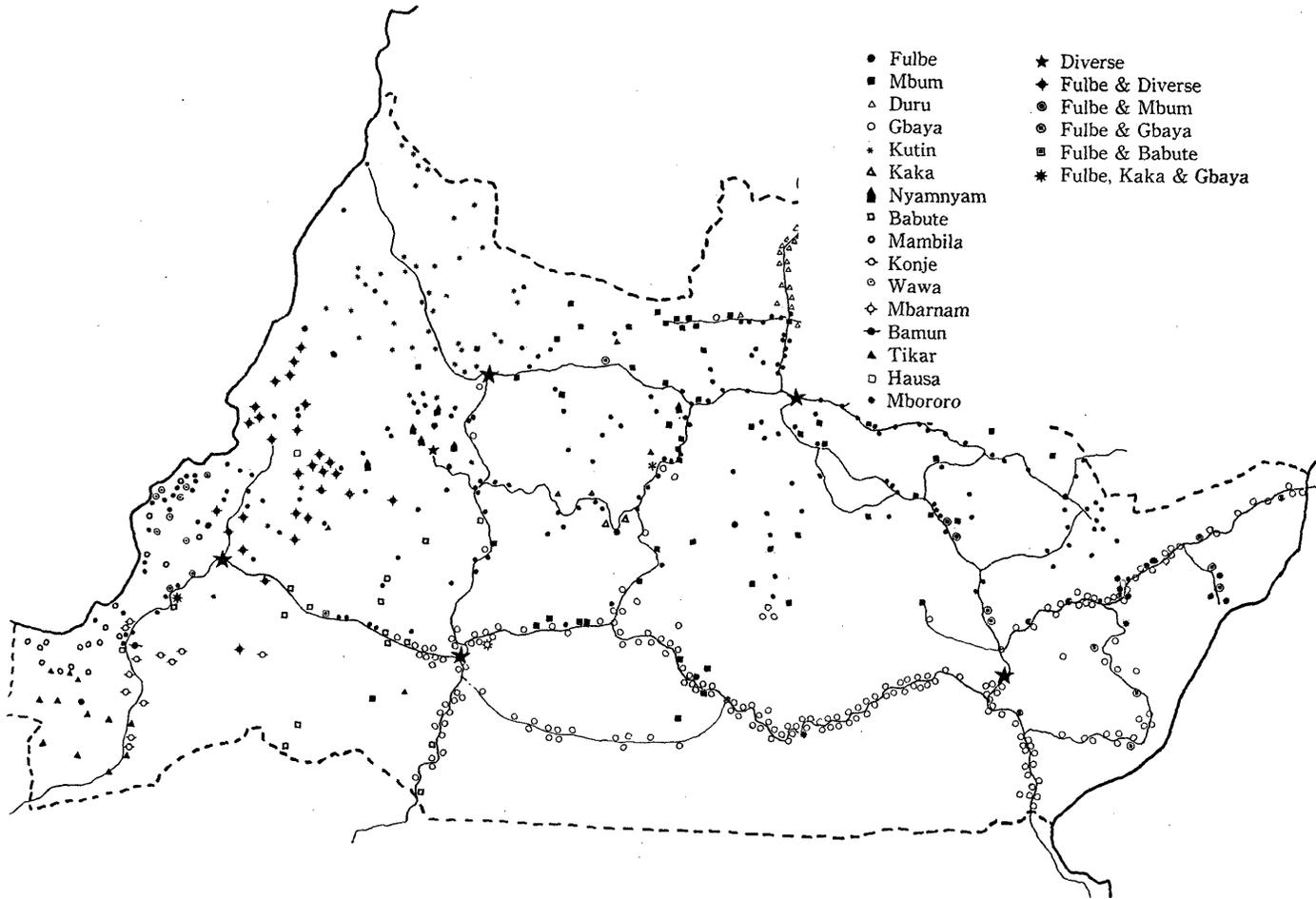


図3 アダマワ地域の民族分布

Gàngmàanjúk) の時代に¹¹⁾、北方のドゥルの人びとが、アダマワ高原の上のブームの土地にすむことをねがいで、ベラカに臣従することをちかって、いまのガンガサウ (Gangassaou) の村を建設したという。その後も、北方からのドゥルの移住はすすみ、現在バングブーム周辺では、人口的に、ブームをはるかに凌駕する¹²⁾。他方、東方からは、中央アフリカ共和国中央部から西への移転をつづけてきたバヤ (Gbaya) が、アダマワ高原にいたり、メイガンガ郡、ティバティ郡、さらに現在ではガウンデレ郡へと、そのテリトリイをひろげている¹³⁾。

18世紀中期ころに、ウシをおって南下してきたフルベ (Fulbe) の人びとが、アダマワ高原にいたり、ブームのテリトリイにすみついた。農耕民であるブームと、牧畜民であるフルベは、はじめは友好的で、フルベの首長は、ブームのベラカの一族の子女をめとる習慣になっていたといわれる。

19世紀にはいて、ナイジェリア西部で、フルベのイスラム教師ウスマン・ダン・フォディオ (Uthman dan Fodio) が聖戦をおこすとヨラ (Yola) のフルベ (Fulbe) のイスラム牧師モーディボ・アダマ (Moodibo Adama) がそれに呼応して、北部カメルーン各地のフルベの首長によびかけて聖戦を展開し、全域の農耕民を征服して、数十のフルベのイスラム首長国 (Lamidat) が建設された。それぞれのイスラム首長はラーミド (laamiiḍo) をなおり、それぞれ独立した地域での支配体制を確立した¹⁴⁾。

アダマワ地域では、西から、バニョ (Banyo)、ティバティ (Tibati)、ティニエレ (Tignère)、ガウンデレ (Ngaoundéré) の4つの首長国ラミダット (Lamidat) が成立した。ブームの土地は、ベーレ (Mbère) の土地の大半が、北方のレイブーバ (Ray Boubā) のラミダットの支配下に、マナ (Mana) はティニエレの、バングブーム、ガンハ、ブサはガウンデレのラミダットのもとに統合された。ガウンデレのラミダットの場合、その支配は、フルベ農牧村落、ブーム、ドゥル、バヤなど合計207の周囲村落におよんだ。

11) 現在のベラカ (Bélakà Ab-bakar) は、始祖のベラカ (Nyáàsàrà-mbùm) からかぞえて33代目のベラカになる。以下25～33代のベラカの名を記す。

25 Bélakà Gàngmàanjúk, 26 Bélakà Gàngajùì, 27 Bélakà Nyáàmbám, 28 Bélakà Gàngéù, 29 Bélakà Gàngmàanjúk, 30 Bélakà Jéiyà, 31 Bélakà Ngèrbùm, 32 Bélakà Mbàrsòlà, 33 Bélakà Ab-bakar. 詳細は [HINO 1978: 171-173] 参照。

12) 一般にドゥルは、ベヌエ川源流部の平原にすむ平原ドゥル (Dourou de la Plaine) と、アダマワ高原に移住した高原ドゥル (Dourou du Plateau) にわけられる。前者がヨーロッパミッションによりおもにキリスト教徒に改宗したのにたいして、後者はガウンデレのラミダットのもとでイスラム化した。

13) バヤ (Gbaya) については、[BURNHAM 1980, 1981] を参照。

14) ガウンデレのラミダットの歴史については、[FROELICH 1954, 1956; LACLOIX 1952; MAHAMMADOU 1978: 225-387] を参照。

このフルベによる聖戦の展開は、バングブームでは27代目のベラカ・ニャーンバム (Bélakà Nyáambám) の時代にあたる。伝承によれば、ティバティの首長モーディボ・ハマンサンボ (Modibo Hamansambo) が軍勢をひきいてこの地にあらわれ、臣従とイスラム改宗を強制した。戦いをいどんだが散々にうちやぶられ、降伏したという。この戦火により、ブームの人口は一挙に減少した。領土内のおおくの村が、掠奪逃散などによって消滅、もしくは離散した¹⁵⁾。たとえば、バングブームの領土内のおおくのブームの村々の人びとは、戦火におわれて、アダマワ高原を北へおりて、ベヌエ平原のドゥルの土地へとのがれた¹⁶⁾。かつて、バングブームのベラカの首邑フルク (fù lúkú) は、2,000人以上の人口をもっていたといわれるが、現在では、ドゥル移住民もふくめて433人 (ブームのみでは191人、1970年) にすぎない。

ガウンデレのラミダットの国土内には、おおくの半農半牧のフルベの村々が建設され、ジャウロ (jauro) とよばれる、ラーミドによって任命されたチーフがおかれる。同時に、地域内のブームやドゥルの村々でも、同じようにジャウロがえらばれ、ラーミドと主従関係をむすんで、貢税の義務をおう。また、おおくの四散した、あるいは抵抗をつづけたブームやドゥルの人びとがとらえられ、ガウンデレのフルベ、ハウサ、ボルヌ (Bornu) の自由民 (rimbe) のもとで、ラーミドつき下僕や家つき下僕などの不自由民 (maccuße) として隷属させられた。

このように、フルベによる征服とラミダットの成立によって、ブームのベラカは、その領土的基礎を収奪され、かつての首邑フルクのみを統治する、フルベ・ラミダット下のジャウロとしての地位があたえられた。そして、旧領土内に、おおくのフルベ農牧村落が建設された結果、バングブームのベラカのフルクは、しだいに、旧領土の東端、ビニ川の岸ちかくへとおしやられた。図4は、27代のベラカ・ニャーンバムから、33代のベラカ・アブバカル (Bélakà Ab-bàkàr) までの代々のフルクの移動をしめしている¹⁷⁾。

15) 1971年の調査時、ベラカ・アブバカル、かつてバングブームのテリトリイ内にあったブームの村の名前を、記憶をたどって25ほどあげたが、現在の Dictionnaire des Villages d'Adamaoua でみつけられるものは十指にみたない。その領域は、ガウンデレの西方約50キロのバカル (Pakal), リコク (Likok), ガンジャキラ (Gandjakira) におよぶ。

16) 現在、ベヌエ川源流部のドゥルの地域、ムベ・ディストリクト (Mbe District) では、Voulnyi Mamboum, Voulnyi Barsola, Ngaouyak, などのブーム語起源とみられる地名をもつ村々がみられる。端信行が調査した Ngesek Gay 村の草分けは、ブーム起源といわれる [端 1971, 1980]。また、ドゥルのテリトリイの北部にある、Ngaouyanga (馬の山の意) はブーム語起源であり、かつてドゥルのテリトリイかに支配されていたという伝承もある [FARAUT 1981: 167]。

17) バングブームのベラカ・アブバカルによれば、ブームのもっと古いフルクの場所は、ガウンデレ北方10キロのガウホラ山 (Ngaouhora) (標高 1301 m, 火の山の意) など、ビニ川の南がわにもおよんでいる。筆者は、1984年、エルドリッジ・モハマドゥ氏とともに、この山にのぼり、頂上に、石づみの住居址群をみいだした。

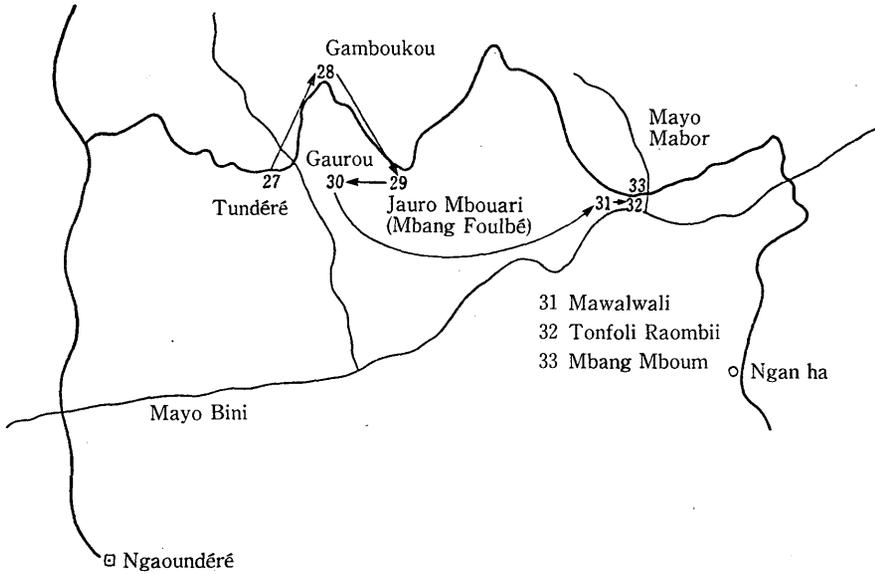


図4 バングブームのフルクの地域移動

そして、ベラカがフルベ・ラミダットのもとでのジャウロとして、1年のうちの何か月かをここでくらし、ラーミドへの忠誠をしめすための住居、いわば上やしきとでもいえるものがガウンデレに建設された。現在ガウンデレのまちの東端、アウディ地区にあるバングブームのベラカの住居は、31代のベラカ・ゲルンブム (Bélakà Ngèrbùm) の時代に画定されたものだという¹⁸⁾。

20世紀初頭、カメルーンがドイツによって植民地化され、アダマワ地域の各フルベ・ラミダットも征服された。しかし、植民地政府は、フルベ・ラミダットの行政・集税組織の有用性に着目し、従順な傀儡のラーミドをおくかたちで形骸的に温存させた。そして、アダマワ地域全域を、アダマワ県 (Adamaoua Préfecture) を画定するにあたって、各ラミダットの領土を、ほぼそのまま、植民地体制下の郡 (Sous-Préfecture) として、統治体制をつくりあげた。このシステムは、第一次大戦後にあたらしい宗主国フランスによって、さらに1960年カメルーン独立後も、おおきな改変をみることな

18) ブーム社会のかつての存立基盤であった、ベラカの相互不可侵性にもとづく体制が崩壊し、ガンハと、バングブームの両方のベラカは、ともに、ガウンデレ・ラミダットのもとでのジャウロとして、近接する機会が必然となった。ガウンデレにおける両者の住居は、150メートルほどしかはなれていない。かつて、ガウンデレのラーミドのやしきでは、午前ガンハのベラカがラーミドにあいにいけば、バングブームのベラカは午後に行くというように、注意ぶかくその接触がさげられていた。双方が相まみえたのは、ガンハの先代のベラカ・サオンブム (Bélakà Sāombùm) がイスラムに改宗したのち、つまり、1950年代にはいつからだという。

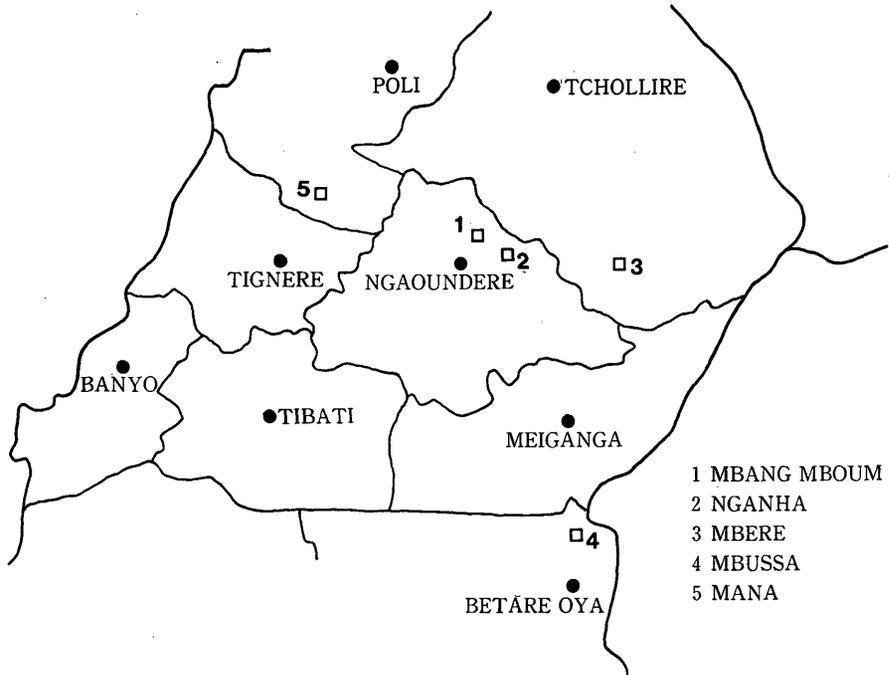


図5 行政区劃とブームのフルクの配置

く継承された。そしてフルベ・ラミダットのもとでのジャウロであったバングブームのベラカは、そのまま、植民地体制下の村長 (Chef du Village) となり、独立後もひきつづいてそのしごとにある。

こうして、現在、かつてのブームの領土、そして、フルベ・ラミダットの領土であったアダマワ地域は、その全体がカメルーン共和国北部州アダマワ縣¹⁹⁾となり、かつてのラミダットのテリトリイをほごうけついだかたちで、パンニョ、ティニエレ、ティバティ、ガウンデレ、そのガウンデレから1923年に分離したメイガンガ (Meiganga) の4つの郡とムベ (Mbé)、バンキン (Bankin)、ジョホン (Johong) の3つの地区 (District) とからなりたっているのである (図5)。

2) 地域の基層文化としてのブーム文化

この地域の先住民族としてのブームは、その後、ドゥル、バヤ、フルベ、ハウサなどの諸民族の来住をむかえ、ともに、アダマワ地域社会の形成にかかわってきた。

現在、この地域のこれらの諸民族のおおくはイスラム化しており、割礼をおこなう。

19) 公的な資料でも、県については、Préfecture とともに、Département という語をもちいる。また、郡についても Sous-Préfecture とともに、Arrondissement もしばしばもちいられる。

現在は病院でおこなうことがおおいが、各地の中年以上の人々にきけば、この割礼儀礼は、近年まで、ブームによって組織され、ブームのかじやが執刀し、ブーム語のうたや儀礼をもちいておこなわれてきた。それは、ガウンデレのみならず、ティバティ、メイガンガ、レイ・ブーバの地域にまで広くひろがっている。

また、アダマワ地域におけるフルベのラーミドのやしき (*saare*) の構造は、あきらかに、たとえば、北部カメルーンのマルア (Maroua) やガルア (Garoua) などのラーミドのやしきの構造とはことなっている。そこには、ブームのベラカのやしきにしめされる、ラーミドへの聖性の賦与がみとめられる。つまり、6つの入口のいえ (*pákfil*) の存在、ラーミドの寝所の孤独性、不可侵性などがみられるし、ラーミドの妻たちのばしょを総括する第一夫人は、マーキラ (*màà kirà*) とブーム語でよばれているなどである。

そして、ガウンデレのラーミドのやしきであるサーレ (*saare*) 内においては、マチュベ (*maccube*) であるブームのことばが、一種の宮廷語として、ラーミドにも、フルベ語に優先してつかわれている。

さらに、P. バーナムによれば、アダマワのバヤ社会においては、バヤの言語、住居形式などにブーム文化の影響がみとめられることを指摘している [BURNHAM 1980: 44-45]。

このように、ブーム文化は、このテリトリィの基層文化として、他の諸民族文化に影響をあたえている。

3. ハングブーム周辺地域の空間配置

1) 位置、自然環境

バングブーム村は、アダマワ高原の中央部、ガウンデレの東北約50キロに位置する。北緯7°31′、東経13°51′、標高1,059メートル。アダマワ高原を東北東にむかって流れ下るヴィナ川の支流、ビニ川北岸から2キロ、ビニ川の支流であるマンバラン (Mambalang) 川と、マボル (Mabor) 川にはさまれた平地にある。村の北方10キロのあたりには、1,200~1,300メートルの山なみが東西につづき、その北がわは、するどい傾斜をなして、ベヌエ川源流部の平原 (標高500メートル) におちこんでいる。アダマワ高原は、東へむかってわずかに傾斜しており、ヴィナ川は、チャド共和国内にはいつてから、ログネ (Logoné) 川に合流し、北上してチャド湖にいたっている。

年間降雨量1,500ミリに比して、植生は乾燥性をつよくしめし、ブッシュサバンナ

的な景観を呈している。

2) 行政区画

バングブーム村は、アダマワ県ガウンデレ郡にぞくする。ガウンデレ等は、7つの小郡 (Canton), 合計225の村 (Village) からなるが、バングブーム村は、その1つ高地ドゥル小郡 (Canton Dourou Plateau) の首村のひとつである。すなわち、この小郡は、バングブーム村を中心とする西部、ガンハ村を中心とする東部の2つの区域 (Lieu) に二分され²⁰⁾、それぞれの村長は、同時に、高地ドゥル小郡の長 (Chef du Canton Dourou Plateau) のタイトルをあたえられている²¹⁾。高地ドゥル郡には²²⁾ (バングブーム管轄12, ガンハ管轄12) の村々があり、総人口は9,119人である²³⁾。この小郡は、ガウンデレから北にでて、時計まわりにまわり、東からガウンデレへもどる全長200キロ余のリングロードにそった村々であるが、この地域においては、それはかならずしもひとつの地域的まとまりをなしてはいない。たとえば、この道路にそって、バングブーム村から3キロはなれたニャセイ (Nyassey) 村は、別の小郡 (Canton Mbang Foulbé, 35の村々からなる) にぞくする。あきらかに、おなじ地域に混在する村々のなかで、フルベ農牧民の村々と、ブームやドゥルの農耕民の村々とは、それぞれ別のまとまりで、2つの小郡をかたちづくっている。すなわち、こゝには、フルベ・ラミダット体制下におけるフルベ自由民の村 (*wuro rimbe*) と、不自由民の村 (*wuro maccube*) という2分法がいまも残存していることがわかる。

この2つの小郡をまとめてみよう。

まず、小学校は、公立のものが、高地ドゥル小郡に5、バングフルベ小郡に4、ほかに、高地ドゥル小郡には、カトリック系小学校が2、プロテスタント系が1。いずれも、4～8年生の小学校までで、それ以上は、ガウンデレへでなければならぬ (図6)。

バングブーム村の小学校には、1970年当時8年生までで、4人の教師がいた。4年

20) この管轄は、ほゞ、かつてのバングブーム、ガンハの両ベカラのテリトリイによっている。

21) この小郡長については、具体的な役割や権限、あるいはオフィスをもっているわけではない。しかし、独立記念日式典などの、ガウンデレでひらかれるあつまりには、地区 (Canton) の代表として参加することがある。

22) バングフルベ小郡には、1つだけ、ブームの村 Ndouar Dama (人口23人) がふくまれているが、間接的なインフォメーションによれば、この村は、あるフルベの自由民が所有していた、解放された不自由民 (*riimaybe*) の開拓村だといわれる。詳細については未調査である。

23) カメルーン国立人文科学研究所編の *Dictionnaire des Villages de l'Adamaoua* (1975) による。じっさいには、このほかに、Vak (人口228人)、Gengene (人口63人) などのドゥルの村がある。

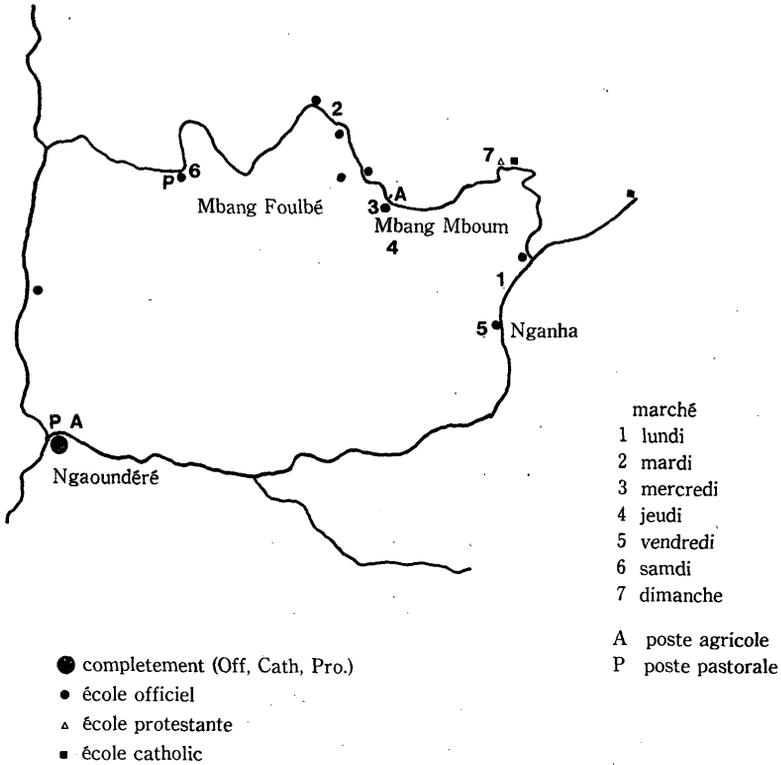


図6 バングブーム周辺の市場と学校の分布

までの初級では、バングブーム村のほか、バウシ (Baoussi)、デナ (Dena)、ワラク (Warak)、マンバラン (Mambalang)、サボンガリ (Sabongari) などの村々から、5～8年の上級では、さらに、ニャセイ (Nyassey)、アワ (Awa)、マラ (Mara) などの生徒もくわわっている。1970年当時の生徒数は、約180人であった。通学距離は、最大は ≥ 10 キロにおよぶ。

バングブーム村に農業指導所 (Poste Agricole)、バングフルベ村に牧畜指導所 (Poste Patorale) がおかれ、ともに1人の駐在員がおかれ、管内を巡回している。

3) 民族分布

高地ドゥル小郡の24の村のなかで、ブームの村と分類されるものは、バングブーム、ガンハ、ムンゲル (Mounguel) の3村だけで、のこりはドゥルの村とされている。他方、バングフルベ小郡の35の村は、ブームと分類されるドゥアル・ダナ (Ndouar Dana) をのぞいて、すべて、フルベの村である (図7)。

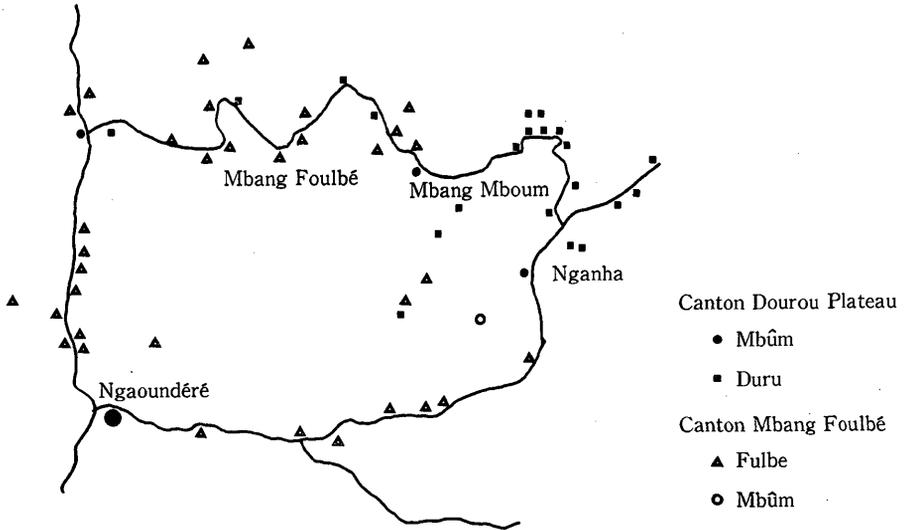


図7 バングブーム周辺部の民族分布

しかし、こゝにおいてもちいられている民族別の村の分類の基準は、基本的には、その村において最大人口規模をもつことによっているとかんがえられる²⁴⁾。とうぜん、おおくの村々は、2～3のことなる民族のメンバーを内包している。

たとえば、ブームの村とされているバングブームは、ポドレウスキの調査によれば、総人口551は、280人のブーム、270人のドゥル、10人のフルベをふくむ。また、ドゥルの村とされているガンガサウのばあいは、1,168人の総人口に80人ほどのブームをふくんでいる。さらに、フルベの村々では、かつてのマチュベにぞくするブーム、ドゥル、ラカ、カカなどの人口をふくんでいる²⁵⁾。

高地ドゥル、バングフルベの二つの小郡をまとめてみると、その民族別人口はつぎのようになる。

Fulbe	4,329
Mbûm	1,194
Duru	6,924
Laka	666
Diverse	2,140
Total	15,253

[PODLEWSKI 1970: 1966年統計, 26]

24) Dictionnaire des Villages de l'Adamaoua においても、その規準は明記されてはいない。またポドレウスキの分類と、DVA. の分類とでくらべると Massakbatt, Tellere (P-Mbum, DVA. -Duru) などのこととなっている [PODLEWSKI 1970: 27]。

25) [PODLEWSKI 1970: 27] の地図より作成。しかし、20人ごとの概数でしめされているので、その正確な実数は不明である。

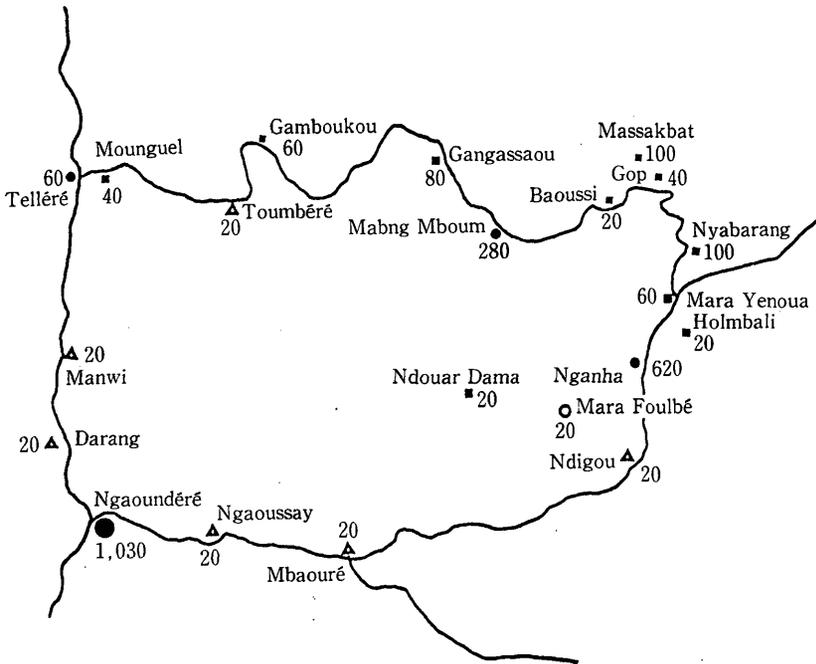


図8 バングブーム周辺諸村におけるブーム人口(概数)
[PODLEWSKI 1970: 27]

ブームの人口についてみると、その75パーセントは、バングブーム、ガンハの二村に集中、のこりの25パーセントは、図8のように、マサクバト (Massakbatt)、ニャバラン (Niabarang)、ガンガサウ (Gangassaou)、ムンゲル (Mouguel)、ガンブク (Gamboukou)、テレレ (Telleré)、その他の村々に分散している。

あきらかにブームは、この地域において、二つの首邑をのぞけば、極端に少数化しており、ほとんど、民族としてのまとまりはしめしていない。しかし、バングブームのベラカを例にとれば、かれは周辺のドゥルの村々を、みずからの支配下におきつけてきたし、いまもおいているという意識を根づよくもっている。他方、ガンガサウやガンブクのドゥルの村長が、バングブームのベラカに対するときのふるまいには、あきらかに、へりくだった態度がいまもみられる。

ブームが大半をしめるテレレ村 (人口35人) については、ドイツの植民地時代に、強制労働の道路建設のために徴用されたバングブーム出身のブームが、そのまゝつくれた村であるとされ、バングブームの分村であるという意識がある。また、ブームが少数 (約22パーセント) をしめるガンブクは、バングブームのかじやグループ (ベラカから、ベラカ・ブク (belàkà mbùkù) のタイトルをもらっている。(belàkà はビッ

グマン, mbùkù はかじやのふいごの音) がつくった村とされている。

一方、ドゥルは、この小郡での多数をしめるが、移動性がたかく、村はいまもうごいている。1950年の航空写真をもとに作成した、この地域の1/50000の地図によれば、おおくのドゥルの村々は、現在とことなる場所にある。おおくの村々は、この20年余のあいだに、リングロード周辺へ移動してきている。また、バングブーム、ガンハのブームの首邑においても、ドゥル人口の流入は顕著である²⁶⁾。ポドレウスキーの調査では、バングブーム村のドゥル人口は、約47パーセントとなっているが、筆者の、ライフヒストリィ調査にもとづく人口数では、ブーム44.1%、ドゥル53.6%と、ブームが少数化している。

4) 商 業 圏

この二つの小郡においては、一週間で一巡する定期市がみられる。つまり、図6のように、月曜日のイエノア (Yenoa) から始まって、日曜日のベレム (Berem) で完結する。このほかには、ガウンデル郊外のダン (Dang) で日曜日、また、小郡南部のバラング (Mbalang)、ガウサエ (Ngaoussaye) では、道路沿いに商人が商品を出す不定期市が随時ひらかれている。

定期市の日には、ガウンデレから商人をのせたトラックや小型バスがやってきて、周囲の村々からも農産物や、さまざまな商品をもった人々があつまってくる。東端のイエノア (Yenoa) から、西端のバングフルベまで、公道をとおって約40キロ、ブッシュのなかの間道をつたって約25キロ、人々は、市場の日をめがけて、商品をもって往復する。

図9と表1は、1970年3月4日(水)のバングブーム村における定期市にやってきた、のべ111人の売り手たちの居住村、民族、商品の種類、性別をしらべたものである。東はヴァク (Vak)、イエノアから、西はバングフルベまでの18村からと、11人のバスやトラックにのってガウンデレからやってきた商人がみられる。売り手リストの1~9の衣類、11~19の古着、20人ほどの小間物、荒物、コーラナツをあつかう商人は、各定期市をかなり広くあるく企業的な人々である。他方、59~111の女性の売り手は、そのときどきの収穫物、あげドーナツなどの加工食品、地元製の石けんなど、日々の現金収入をもとめての人々である。47~51のガウンデレからの商人は、農産物、ニワトリ、タマゴなどのかいつけにやってきた人々である。

かいつけられた農産物(季節におうじて、ソルガム、マニオック、とうもろこし、

26) バングブーム村におけるドゥル受入れのプロセスについては、[日野 1974]を参照。

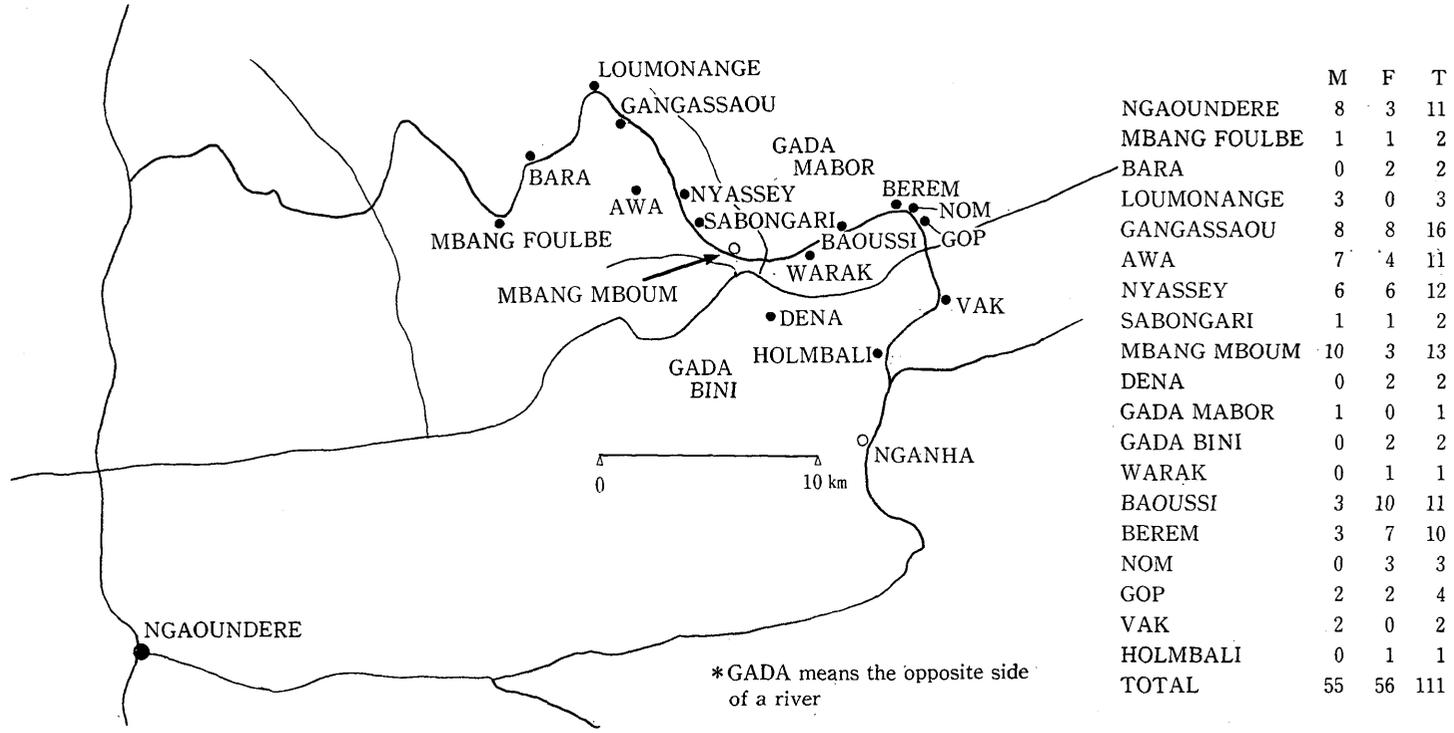


図9 バングブームの定期市にあつまってきた売り手の分布

表1 バングブーム村の定期市の売り手のリスト

1 Gbaya (Ndere)	衣類	48 Mbum (Ndere)	雑穀買付け*
2 Duru (Vak)	衣類	49 Mbum (Ndere)	雑穀買付け*
3 Hausa (Ndere)	衣類	50 Mbum (Ndere)	雑穀買付け*
4 Fulbe (MF)	衣類	51 Mbum (Ndere)	雑穀買付け
5 Fulbe (Nyassey)	衣類	52 Hausa (Ndere)	雑穀買付け
6 Duru (Mberem)	衣類	53 Duru (Baosi)	ナワ
7 Duru (MM)	衣類	54 Fulbe (Ndere)	雑貨
8 Fulbe (Awa)	衣類	55 Mbum (Ndere)	カン(調味料)
9 Duru (Gangassaou)	衣類	56 Duru (Baosi)	豆類
10 Hausa (MM)	雑貨	57 Duru (Baosi)	豆類
11 Hausa (Mdere)	古着	58 Fulbe (Awa)	魚
12 Duru (Gangassaou)	古着	59 Fulbe (Awa)	果物*
13 Duru (Loumonange)	古着	60 Fulbe (Bara)	果物*
14 Duru (Gangassaou)	古着	61 Fulbe (Awa)	果物*
15 Duru (Gangassaou)	古着	62 Fulbe (Bara)	ピーナツ*
16 Duru (Vak)	古着	63 Duru (Sabongari)	ピーナツ*
17 Duru (MM)	古着	64 Fulbe (Nyassey)	ピーナツ*
18 Duru (Gop)	古着	65 Fulbe (Nyassey)	野菜*
19 Duru (Gop)	古着	66 Fulbe (Nyassey)	野菜*
20 Fulbe (Nyassey)	雑貨	67 Fulbe (Nyassey)	果物*
21 Duru (Gangassaou)	雑貨	68 Fulbe (Awa)	果物*
22 Mbum (MM)	雑貨	69 Fulbe (Nyassey)	果物*
23 Fulbe (Ndere)	雑貨	70 Fulbe (Awa)	医薬品*
24 Duru (Mberem)	食器荒物	71 Duru (Baosi)	野菜*
25 Duru (MM)	シオ	72 Duru (Baosi)	果物*
26 Duru (MM)	シオ	73 Duru (Gangassaou)	野菜*
27 Duru (MM)	食器荒物	74 Duru (Gangassaou)	野菜*
28 Duru (Loumonange)	雑貨	75 Duru (Gangassaou)	サトウキビ*
29 Duru (Loumonange)	雑貨	76 Duru (Gangassaou)	サトウキビ*
30 Fulbe (Nyassey)	鉄製品	77 Duru (Gangassaou)	サトウキビ*
31 Fulbe (Nyassey)	コーラ・ナツ	78 Duru (Gangassaou)	サトウキビ*
32 Fulbe (Awa)	コーラ・ナツ	79 Duru (Gangassaou)	サトウキビ*
33 Fulbe (Awa)	コーラ・ナツ	80 Duru (Gangassaou)	サトウキビ*
34 Fulbe (Awa)	コーラ・ナツ	81 Duru (Baosi)	野菜*
35 Fulbe (Awa)	コーラ・ナツ	82 Duru (Baosi)	野菜*
36 Fulbe (Nyassey)	雑貨	83 Duru (Baosi)	野菜*
37 Fulbe (Gada Bini)	タバコ葉	84 Duru (Baosi)	野菜*
38 Fulbe (Awa)	タバコ葉	85 Duru (Baosi)	ピーナツ*
39 Duru (Mberem)	タバコ葉	86 Duru (Warak)	ピーナツ*
40 Mbum (MM)	ナワ	87 Duru (Baosi)	野菜*
41 Duru (Sabongari)	靴なおし	88 Duru (Baosi)	野菜・ピーナツ*
42 Bamileke (Nyassey)	タバコ葉	89 Duru (MM)	野菜*
43 Duru (MM)	衣類	90 Duru (Gada Mabor)	野菜*
44 Mbum (MM)	食肉	91 Duru (Gada Mabor)	野菜*
45 Duru (Gangassaou)	雑貨	92 Duru (Mberem)	野菜*
46 Duru (Gangassaou)	雑貨	93 Duru (Nom)	ヒョウタン*
47 Duru (Gangassaou)	雑貨	94 Duru (Mberem)	野菜*
47 Mbum (Ndere)	雑穀買付け	95 Fulbe (MF)	自家製石鹼*

96 Duru (Mberem)	野菜*	108 Duru (Gop)	ヒョウタン*
97 Duru (Mberem)	野菜・タマゴ*	109 Duru (Gop)	干魚
98 Duru (Baosi)	野菜*	110 Mbum (MM)	自家製石鱈*
99 Duru (Mberem)	野菜・ヒョウタン*	111 Mbum (MM)	自家製石鱈*
100 Duru (Mberem)	野菜*		
101 Duru (Mberem)	野菜*		
102 Duru (Nom)	ヒョウタン*	略号	
103 Duru (Nom)	野菜*	Place Name	
104 Duru (Holmbali)	豆類・野菜*	Ndere	Ngaoundéré
105 Duru (Dena)	野菜*	MF	Mbang Foulbe
106 Duru (Dena)	野菜*	MM	Mbang Mboum
107 Duru (Nyassey)	野菜*		

* 女の売手

ヤムイモなどは、すべてガウンデレへはこばれ、売られる。バングブームで1ふくる(約100キロ)900フランでかいつけられたソルガムは、70キロ車ではこんで、12-1500フランで取引きされる。

バングブーム以外の村で市場がひらかれるとき、バングブームの男女は、それぞれ、思い思いの商品をもってでかけていく。バングフルベ、ガンハに行く女たちはすくないが、ルモナンゲ(Loumonange)やベレム(Béréme)、ホルンバリ(Holmbali)には、20キロちかい道のりを徒歩ででかける。自転車をもった男たちは、バングフルベ、ガンハにもときには足をのばす。バングブーム村内の7人のミシンをもった洋裁師は、分解したミシンを自転車にのせて、市場へとむかう。

バングブーム村には、一人のハウサの商人がいる。かれは、市場へでかけていくとともに、バングブームの自分のいえのまえに、小さな机をだして、そこへ商品をならべるし、いつでも注文におおじてストックから商品をだしてくる。一カ月に一度くらいは、ガウンデレへ商品の仕入れにでかけていく。また、村人は、しばしばガウンデレでコーラナツを仕入れて、他の村人の日常の需要にこたえる。

バングブーム村のブームの肉屋は、(リスト No. 44.)ちかくのフルベの村へでかけて行って、ウシをかいつけ、市場がひらかれる前日に屠殺して、その肉を売る。売れのこった肉は、自分のやしきで干し肉に加工して、他村の市場にもっていく²⁷⁾。

5) 社会交流圏

バングブームの人々の日常的な交流圏は、ほど、この定期市サイクルの範囲内にあ

27) 1974年、首都ヤウンデからガウンデレへの鉄道がつうじて、ガウンデレ周辺でのウシの値段が5倍ちかく値あがりし、バングブームの肉やは、ウシをかう資金もなく、買い手の経済力もおいつけず、肉は市場から姿をけした。

る。金曜日のイスラムの集団礼拝は、バングブーム村のモスクでおこなわれるが、村人のほか、ニャセイ、アワ、マンバラン、サボンガリ、ワラク、バッシ、さらにビニ川の対岸部やマボル川対岸部のブッシュに散在するフルベやドゥルの人々も参加する。ビニ川対岸部にすむマールム・アボ (Maalum Abbo) は、ブッシュのなかで隠遁生活をいとむフルベのイスラム教師だが、この周辺でおこったさまざまな宗教上の問題について指導的役割をはたす。人々はしばしばそこをおとずれるし、モスクの改築、老人の死亡、その他にさいしては、バングブームのベラカによばれて指導をおこなう。またベラカの子弟をはじめ、何人かの若者がかれのもとにかよって、コーランの勉強をする。

マールム・ジジ (Maalum Djidji) がこの村にすみつく (1950年代前半か) まえ、村の子供たちは、ビニ川対岸にすんでいたフルベの女性イスラム教師マールム・ハワ (Maalum Haoua) のもとにかよい、コーランをならったという。

ガングクにはかじやのグループが居住している。バングブームの鍛冶屋であるウスマヌ (Ousmanou) は、その一族で、ベラカからベラカ・ブク (Bélakà mbùkù) のタイトルをあたえられている。ガングクの鍛冶屋の妻たちは、素焼のカメづくりをしごとにしており、バングブームの人々も必要におおじて、ガングクでカメを手に入れる。

バングブームの人々は、食料品、衣類、消費材のおおくを定期市で入手するが、同時に、かなりの部分をガウンデレで手に入れる。男子、とくに若者は、しばしば、徒歩 (ブッシュの道をとおって45キロ)、自転車、お金があれば市場がよいのトラックや小型バスを利用して、ガウンデレへでかけていく。一年のかかりの時間をガウンデレで、家の建築、日乾しレンガづくり、雑役などの現金かせぎにすごす人々もすくなくない。そして、しばしば、そのかせいだ現金で、ガウンデレの卸売商で、キャンディ、マッチ、電池などの商品を仕入れ、バングブームで商売に従事することもある。

バングブーム村の人々のライフヒストリィをきくと、商業、ウシの運搬や解体、半熟練労働などで、若い日々をガウンデレ、メイガンガ、首都のヤウンデ (Yaoundé) など、広い地域の遍歴にすごした人もすくなくない。そして、そのまま村へかえらずに都市に定着した人々もある。

さて、ガウンデレへでかけていった人々は、ほぼ例外なく、バングブーム出身の親族や友人の住居をたよってそこに滞在する。ガウンデレにおけるバングブーム村出身者の集住地区は二つある。一つは、ベラカのやしきのあるアウディ街区 (Quartier Aoudi)、もう一つはガルディマ (Galdima) のやしきのあるサボンガリ街区 (Quartier Sabongari) である。基本的にはブームの人々は前者に、ドゥルの人々は後者にたよ

り先をもとめる。

アウディ街区のベラカのやしきは、バングブームの人々によって、ドック・フー・バングブーム (*Ndòk fú Mbàng Mbám*, *ndòk* は腕の意, *fú* は村, つまり支村) とよばれ、中央のベラカのやしきを中心に、10~15家族ほどのバングブーム出身の人々のやしきがあり、人口は70~80人ほどである。その一部は、バングブーム村の重臣カイガマ (Kaigama) の、一部はサルキヤキ (Sarki Yaki) の所有とされ、その縁者の家族がすんでいる。また、一部はベラカの既婚、未婚の子供たちがすんでいるやしきである。ガウンデレの上級学校に進学したバングブームの子供たちは、親族がいるといないにかかわらず、例外なくこゝに滞在する (図10)。

ベラカは、一年のうち、のべ3~4カ月を、このやしきでそごす。ベラカの7人の妻たちのうち、2人がこゝに常住している。ベラカは、行政府への出頭、集会への列席、ラーミドへのあいさつ、宗教儀礼への出席、友人との交流、ときには単なる静養のためにこゝに滞在する。

カイガマ、サルキ・ヤキはもちろん、村人のおおくはガウンデレへでてくると、こゝにねとまりする。その数は、1975年、筆者がこゝで参与調査をおこなったときは、常時ほゞ8~10人をかぞえた。1975年12月、ガウンデレで農業博覧会 (Comice

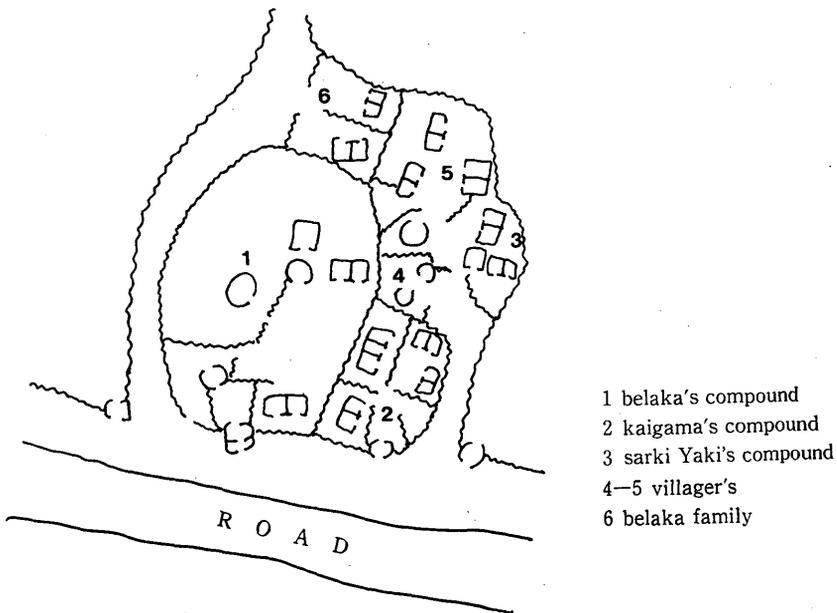


図10 1975年当時のガウンデレのベラカのやしき

Agricole) がひらかれたときは、バングブームからもいくつかの出品もあり、その見物のため、バングブームから170~180人の人々ができてこゝに滞在した。これは、バングブーム総人口の37~39パーセントにあたる。

ガルディマのやしきは、まちはずれのサボンガリ街区の東北端にあり、かれの縁者が常住しており、ガルディマ自身もウシの売買その他の用におおじてこゝに滞在する。村におけるドゥル出身者の代表格としてのガルディマのやしきには、とうぜん、おおくのドゥルの人々がたより先をもとめる²⁸⁾。

また、ガウンデレ東南156キロ、メイガンガ郡の郡都メイガンガはウシの集散地として発達したが、ウシの解体を生業とするバングブーム出身の数家族が、サルキ・ヤキの実兄（1976年に死去）を中心にすみついている²⁹⁾。さらに、現在のバングブーム村のベラカ・アバカル (Bélakà Ab-bàkaà) の実弟ウスマヌ (Ousmanou), は、長い遍歴生活ののちに、メイガンガ東北100キロのジョホン (Johong) の近くにすみついている。

ウシの解体を生業にするバングブーム村出身の人々は、ほかに、首都のヤウンデをはじめ、その南方のバルマヨ (Mbal Mayo), 西カメルーンのコンサンバ (Nkong-samba) など、カメルーンの広い地域に分布しているし、サルキ・ヤキの実兄の一人は、中央アフリカ共和国のブワル (Bouar) のちかくでおなじ生業に従事している³⁰⁾。

現在、バングブーム村にすんでいるウマル・サンダ (Oumar Sanda, 1981年に死去) は、メイガンガ西北60キロのブーラ (Mboula) の村長であったが、トラブルにまきこまれ、このバングブーム村のベラカをたよって来住したものである。

6) 通 婚 圏

バングブームの人々は、フルベのイスラム教師のマールム・ジジ (Maalum Djidji, 1979年に死去) がカメルーン北部のガルアの生まれ、ほかにレイブーバ郡1人、メイガンガ郡10人（1家族ウマル・サンダ一家）をのぞいて、全員がガウンデレ郡内の生まれである（1980年 Census 原票による）。筆者の調査では、男子の約80パーセントはバングブーム村の生まれ、のこりは周辺の村々である。ドゥルの人口の方が、村外生まれの比率は圧倒的にたかい。女子では、約65パーセントが村内生まれだが、既婚

28) バングブームにおいてガルディマがはたした役割については、[日野 1974: 42-45] 参照。

29) アダマワ地域においては、ハウサが食肉のギルドをつくっていて、食肉流通ルートを一手ににぎっているが、ブームはそのもとで、屠殺牛の解体の役割をになっている [日野 1980: 103]。

30) サルキ・ヤキ自身も長いあいだ、この生業に従事。また小商人としてガウンデレにいたが、実兄二人が村へかえらないために、村にもどってサルキ・ヤキの役職についたという経歴をもっている。

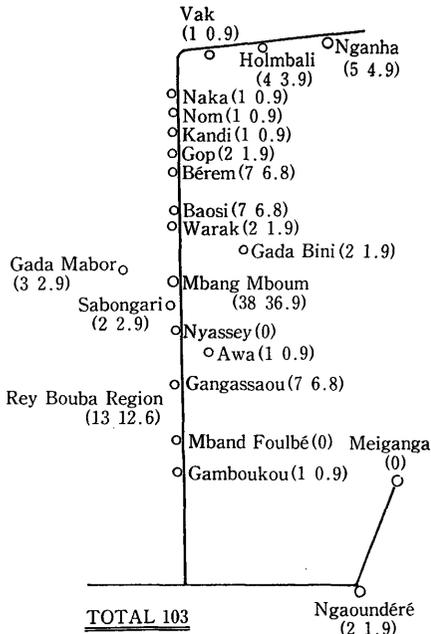


図11 バングブームの既婚の女の出身地

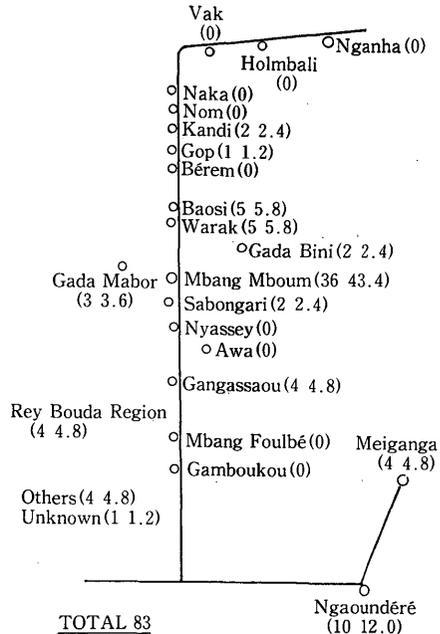


図12 バングブームの女たちの婚出先

女性のみにかぎれば、40パーセント以下になる。

既婚の女たちの出身地をみると、図11のように、村内出身者が38(36.9パーセント)、高地ドゥル小郡内出身者が49(47.6パーセント)、あわせて、84.5パーセントになる。のこりは、レイブーバ郡12.6パーセント、ガウンデレ生まれ1.9パーセントである。

他方、バングブーム村に混住する人々の子女の婚出先をみると、図12のように、村内36(45.8パーセント)、小郡内が24(28.9パーセント)と、あわせて74.7パーセントをしめる。のこりは、レイブーバ郡4.8パーセント、ガウンデレが12.0パーセント、メイガンガ4.8パーセント、その他6.0パーセントになる。その他には、首都ヤウンデ、バルマヨ、ガルア、などがふくまれる。婚出先については、近年、あきらかに、ガウンデレへの婚出の増加がいちじるしい。

7) 就 職 圏

カメルーン独立まもない1960年代前半に、バングブーム村に公立小学校が誘置され、村のおおくの子女が学校にかようようになった。1970年当時の約180人の生徒のうち133人のバングブーム在住の生徒は、あるものはガウンデレの上級学校に進学し、あるものはガウンデレで就職、あるものは親のもとにとどまり、あるものは結婚した。

表2 バングブームの公立学校卒業者の12年後の住地と職業

	Mbang Mboum	近隣村落	Ngaoundéré	Meiganga	Yaoundé	Northern Towns	Others	Total	%
BOYS									
農 民	18	2						20	31.7
公立学校生徒	5		5					10	15.9
コーラン学校生徒		1					1	2	3.2
無 職			6					6	9.5
未熟練労働者			6		2			8	12.5
ドライバ－			2					22	3.2
肉 屋			1	1	1			3	4.8
下級役人			3			3		6	9.5
教 師						1		1	1.6
軍 務			1		1			2	3.2
(死 亡)								(3)	(4.8)
Total	23	3	24	1	4	4	1	63	
%	36.5	4.8	38.1	1.6	6.3	6.3	1.6		
GIRLS									
結 婚	10	25	13	4	2	3	2	59	84.3
コーラン学校生徒			4			1		5	7.1
無 職*	2		2					4	5.7
(死 亡)								(2)	(2.9)
Total	12	25	19	4	2	4	2	70	
%	17.4	55.7	27.1	5.7	2.9	5.7	2.9		

* 自家での家事労働もふくむ

1982年に筆者は、この子供たちが、現在どこにすみ、何をしているかの追跡調査をこころみた。

その結果は表2にしめすとおりである。男子のばあい、村にとどまったものが36.5パーセント、近隣の村にすんでいるものが4.8パーセントとあわせて約40パーセント、ガウンデレへでているものが38.1パーセント、その他の各地へでているものが16パーセント、死者が4.8パーセントと、そのおおくがガウンデレへでて、進学、あるいは半熟練労働、下級公務員などに従事している。ウシの解体に従事しているものは、ガウンデレ、メイガンガ、ヤウンデに各1人となっている。

他方、女子は、バングブーム村内で結婚したものが14パーセント、近隣の村で結婚したものが55.7パーセントで、ガウンデレへでたもの27.1パーセントには、婚出18.6パーセント、進学（コーラン学校をふくむ）5.7パーセント、ほかにはメイガンガ、ヤウンデその他への婚出者が17パーセントとなっている³¹⁾。

筆者の参与調査では、これらバングブームの小学校をでて、ガウンデレやその他の都市に就職したものは、もうバングブームに帰って定住するみこみはない。

学校教育の普及は、あきらかに、バングブームの人々をカメルーン国民社会のなかに組織化し、バングブームの社会交流圏を拡大させた。しかし、それは、同時に、バングブーム村自体の過疎化、伝統的生業の存続の困難をひきおこしたのである。

8) 生 業 圏

バングブームの人々は基本的に農業をそのおもな生業としている。市場での商業や、ミシンをつかっての洋裁師、鍛冶屋や籠づくりその他の生業は、あくまでも兼業であり、農業をその基本においている。

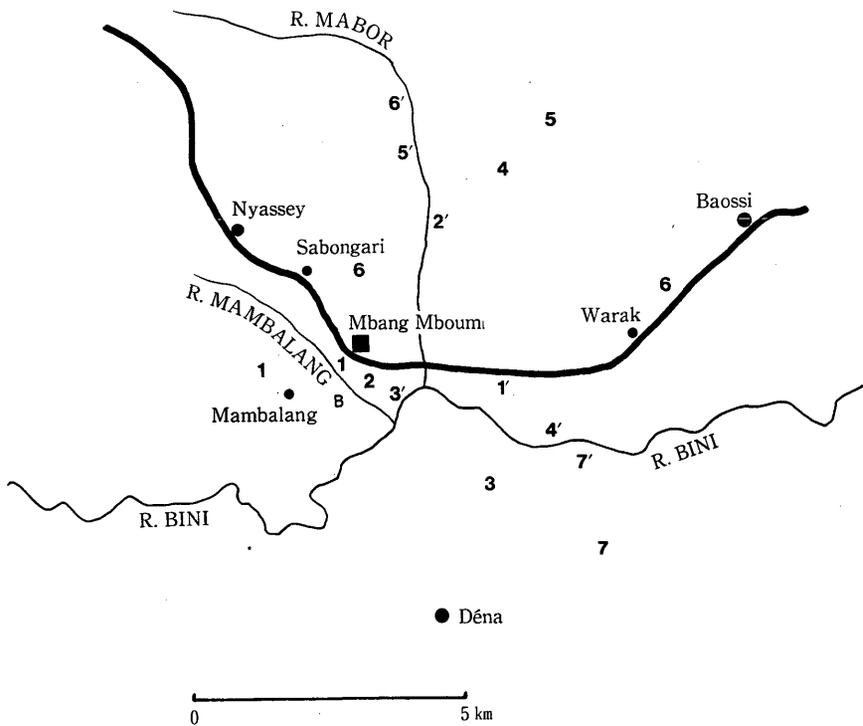
バングブームは次章でのべるように、村全体がひとつの塊となった集村であり、生業の主体である畑は、やしき内の蔬菜、果樹などをのぞいて、基本的には村の外にある。

主要な作物は、伝統的には主食であるモロコシ (*nàng*)、トウジンビエ (*átòkòl*) であり、同時にトウモロコシ (*nàng kúnà*)、マニオック (*mbàì*) も栽培される。1960年後半からマニオック栽培の増大が顕著で、主食としての依存度がいちじるしくたかまっている。このほか、モロコシなどの畑には、ササゲマメ (*àì*)、ヒョウタン類 (*áwálá*, *ádèrè*, *ásim*, *áfìsákà* など)、カボチャ (*álén*, *álén mbám*) などが混播される。ほかに、ピーナツ (*ánjòkà*)、サトウキビ (*ánjìmì*)、タバコ (*tàbàk*)、バナナ (*kùni*) などが現金

31) もちろん、その結婚は、そこにすみついているブームの男のものである。

収入の一助としてうえられる。また、やしきのなかには、ヤム (*kpèi*)、タロ (*àngõã*) などのイモ類、レモン (*lémù*)、マンゴー (*màngorò*) などもうえられる³²⁾。

モロコシ、トウジンビエの畑は、おおむね川から100メートルくらいはなれた乾燥したところにおかれる。一方、トウモロコシはもうすこし川にちかいところ、マニオックは川辺の湿潤なところにうえられる。したがって、おおくの人々は、モロコシ、トウジンビエの畑と、川にちかいマニオックの畑の二つをもっていることがおおい。



- | | |
|-------------------------------|-----------------------------------|
| B Belaka (Sorgham) | 4 Bigaoula (Sorgham) |
| 1 Sarki Yaki (Sorgham, Maize) | 4' Bigaoula (Manioc, Tobacco) |
| 1' Sarki Yaki (Manioc) | 5 Nyaassa (Sorgham, Maize) |
| 2 Kaigama (Sorgham, Maize) | 5' Nyaassa (Manioc) |
| 2' Kaigama (Manioc) | 6 Alim (Sorgham) |
| 3 Galdima (Sorgham, Maize) | 6' Alim (Manioc, Tobacco, Banana) |
| 3' Galdima (Manioc) | 7 Samaki (Sorgham) |
| | 7' Samaki (Manioc, Maize) |

図13 バングブーム村民の畑の場所 (主要作物のみ)

32) バングブームの栽培植物の詳細については、[HINO 1978: 43-65] を参照。

いずれも、村の外、ビニ川、マンバラン川、マボル川などにそった地域に畑がおかれ、村から3～4キロ、ときには10キロちかくもはなれたところになる。ベラカの畑は、マンバラン川とビニ川にはさまれた、村から1キロばかりのところにある。ガイガマやサルキ・ヤキなど、村の重臣たちの畑は比較的村からちかいし、あとから村に加入したドゥルの人々の畑は村からとおい(図13)。サルキ・ヤキは、自分のやしきのとなりのマンバラン川にいたるやゝ傾斜した土地にトウモロコシをうえ、2キロはなれたマンバラン川南岸にモロコシ、2キロ余はなれたマボル川のちかくにマニオックの畑をもっている。一方、ドゥルの土地から若いときにこの村へやってきたニヤッサは、10キロはなれたガダ・マボル(Gada Mabor)にモロコシの、3キロはなれたマボル川のふちにマニオックの畑をもっている。村の重臣の一人、ドゥルの代表格のガルディマは、自らが生まれそだったビニ川対岸(村から10キロ)に広大なモロコシの畑、その川よりにマニオックの畑をもっている。

モロコシ、トウモロコシなどの畑は、5～6年ごとにその隣地へ耕作地をうつす焼畑移動耕作で、その移動、あたらしい畑の開墾は、ベラカの御前会議で承認される必要がある。他方、川辺のマニオック畑は、ほとんど場所をうごかない。

サルキ・ヤキの畑を例にとると、1.5ヘクタールほどのモロコシ畑のうち、約1/8ほどが妻のマエレマ(Maerema)の畑とされている。その収穫物は妻の財産であり、やしき内の妻専用の貯蔵倉(*fùlnàng*)におかれる。売ればそれは妻の収入になるし、妻がモロコシビールをかもして売ることもある。マニオック畑においても妻の所有する畑がある。複妻のばあい、そのそれぞれが持分の畑をもっている。

人々は、おおむね、村から村外の畑にかよう。早朝にでかけて、屋すぎにかえってくる。農繁期、とくに収穫期で、野鳥やイボイノシシ(*bélé*)、ノブタ(*gádùrù*)、カバ(*gbémé*)などの被害が心配される時期、人々は畑に出づくりの小屋(*kùmbì*)をたてて、何週間かをそこですごすことがおおい。

乾季のおわりちかく、次年の播種に先だて、人々は、モロコシ畑に火をはなして、それにそなえる。火入れ(*súng gúì*)、とくに新畑の火入れのばあい、おおくは共同作業(*sùrgà*)でおこなわれる。畑の境界に側溝をほり、あるいは草を刈りとって、風上から火をつけ、人々は葉のついた生の枝を手にもって、境界外に燃えうつりそうときは、それで火をたゝいて消す。このしごとは、おおむね、夜の8～10時、暗くなってからおこなわれる。消火にはじゅうぶん気をつけるが、1965年ころ、隣村のバウシ(Baoussi)では、この火が村にもえうつって、村の大半を焼失した。

モロコシの収穫期、つまり、乾季のさかりは、もっとも忙しい時期である。穂にみ

のったモロコシは、まず、足で踏みたおされ、(*ndánà nàng*)、すこし乾燥したところでナイフで穂の部分を持ちおとし(*kúgà nàng*)、穂のみが一個所にあつめられる。そして、適当な時に、棒でたいて脱穀する(*ndákà nàng*)。この脱穀のしごとは、いっばんに、サケの共同作業(*sùgà yím*)とよばれる共同作業でおこなわれる。その当日、畑の持主の妻たちによってかもされたモロコシビール(*yím*)が用意され、手伝いにあつまった人々は、それをのみのみ、脱穀を手伝う。収穫期、村の人々は順ぐりに、サケの共同作業を主催し、それが一順したときに、村中の脱穀がおわる。敬虔なムスリムである、ベラカや重臣たちのいえでは、モロコシビールのかわりに、食事が提供される。したがって、この時期、村人は連日ブッシュへでかけていくのである。

村からみて、ベラカの畑のむこうがわ、ビニ川にちかい低地は、トンホリ・ラウンビー(*tònfòlì ràumbù*, *tònfòlì* はすてられた村の意, *ràumbù* は水のまんなか)とよばれ、先代のベラカ・バルソラ(*Bèlàkà Bàrsòlà*)の旧都があつたところで、その当時うえられたマンゴーの木や、モスクのあとがのこっている。この周辺は、バングブームの人々の草刈り場になっていて、背よりも高い禾本科の草々が得られる。草ぶき屋根や、やしきのへいになくなくてはならないものである。

また、ビニ川にそつた川辺林は、村人の建材となる樹木がおおい。村の西がわには、かつて営林署の指導でうえたというユーカリの木(*kpù fórà*, *kpù* は木, *fóra* はフランス語の *forêt*, つまり営林署)も、建材として利用されている。

村の人々は、畑へいく道すがら、ブッシュのなかの小樹木を、まき材として採集する。しかし、近年、まき材はしだいに枯渇し、かなりとおくにいかなければ手にはいらなくなった。これは、将来、村の存亡にかかれる重要事になる可能性がある。

かつてブームの人々にとっては、狩猟は、農耕につぐ重要な関心事であつたといわれる[LAMBEZAT 1962: 199]。現在でも、ブッシュにでるとき、弓矢を携帯するのがおおい。しかし、獲物は、わずかのホロホロ鳥(*lói*)、ノウサギ(*rómá*)などで、生業的な意味はうしなわれている。また、漁撈も、ナマズ(*mbói*)などが趣味的に釣られるのみになっている。

家畜は、ヤギ(*hólá*)、ヒツジ(*sámá*)、ニワトリ(*káká*)がやしきの周辺でかわれるのみである。

9) 生活圏

バングブームの人々は、生活用水のおおくを、ちかくのマンバラ川、マボル川にたよっている。村の中央部に井戸(*gùgà*)はあるが、モスク用、ベラカや何人かの重

臣のほかは、ほとんど利用しない。

水浴びは、成年の男たちは、妻子に川の水をはこばせて、やしきのなかでおこなうが、女たちや子供は、川にでかけて、きまった場所で水浴びをする。女たちの水浴びの場所と、若い男たちのそれとは、数十メートルはなれている。

村にいちばんちかいマンバラン川の一部は、女たちの洗濯、穀物とき、食器などのあらいものをする場所になっている。深さ30センチほどの川の中央に、いくつかの大きな洗濯石がおかれ、衣類をそれにたゝきつけて洗濯する。女たちは、しばしば、着衣のまゝ水につかり、水浴びと洗濯を兼ねる。洗濯物は、川の周辺の草の上にならべて干し、かわくのをまってやしきへもちかえる。

また、いえをたてる時には、マンバラン川の周辺の土をほって、川の水をつかって、粘土をつくり、あるいは、日乾しレンガをつくって建材にする。ラテライト性の土は、水とまぜて、足でふむと、粘性をしめして、そのまゝ土壁にすることができる。この粘土はいくらかの枯草とまぜて、木のわく (*fëndàkà brikù*) に入れ、型をぬいて、そのまゝ日に干して日乾しレンガをつくる。

10) 宗教儀礼、通過儀礼など

日常のイスラムの礼拝は、村の中央モスクでおこなうが、断食月あけの祝日 (*julde ramabaana*)、巡礼月10日の犠牲祭 (*julde laihaaji*) のふたつの大祭には、村の外数キロの平地においのりの場所 (*ràù dīngà*) をつくって、バングブームのみならず、ニャセイ、マンバラン、サボンガリ、ワラクなどの人々もつどって共同礼拝をおこなう。この日には、騎乗のベラカを中心に、村の男たち全員が、おもいおもいの武具(弓矢、剣、やりなど)を手にたずさえて、いっしょに隊列をくんで、おいのりの場所まで行進する。ベラカのやしきから、時計と反対まわりの道をとって、おいのりの場所まで行き、おいのりがおわたたら、また隊列をくみ、おなじ道をとおることなしに村へもどってくる。

ブームは伝統的に少年たちの割礼の習慣をもつ。現在では、8~12才くらいの少年たちが、年長の少年たちにさそいだされて、ブッシュにつれられていって、そこで割礼 (*ndéù*) をうける³³⁾。かつては、村から数キロはなれた場所に小屋をつくって、こゝに1~2カ月間年長の少年たちとともにとまりこんで、割礼のあと、さまざまな訓練をうけたという。1970年代になってからは、小屋をつくらずに、村の最端にあるやしきのなかのいえをひとつ借りて、そこからブッシュへでかけていくようになった。

33) ブームの割礼については、[HINO 1978: 135-141]を参照。

期間も、学校などの関係で、1～2週間に短縮されている。その場所は、儀礼のなかで水浴びが重要な一部となっているため、おおくはビニ川やマボル川の岸ちかくの川辺林のなかがえらばれる。毎年一定の場所ということはなく、また、その場所は秘密であるとされている。

人が死ぬと、かつては、そのやしきのなかに埋葬された。これは1950年代までつづいていたが、いまは、村の外1キロのところに共同墓地 (*gidamutua*) がつくられ、そこに埋葬される。墓地では、死んだ順に墓所がさだめられ、家族ごとにまとめられることも、男女別にわけられることもない。墓穴には、すべて、右下に横臥した遺体の鼻先がメッカの方向 (*alkibila*) にむくように、すなわち、ほど、南北に2.5メートル、東西50～70センチ、深さ1.5メートルくらいに掘りさげられる。埋葬後墓標をつくることもない。村人が村以外、たとえば、ガウンデレの病院で死ぬれば、埋葬はガウンデレでおこなわれる³⁴⁾。女性は、死者以外墓地に立ちいることは禁じられている。

11) ブームの空間意識

ブームの人々の空間意識のなかで、とくにはっきりとみとめられることは、人のすむ空間としての村 (*fá*) と、人のすまない空間としての野 (*hói*, 草の意) の区分である。野は、ブッシュ (*hói*) と畑 (*nyàng*) に二分される。川 (*mbii*) は、しばしば、マミワタという魔物 (*màniwátá*) がすみ、夜くらくなってから幼い子供がちかずくと、水にひきこまれ、溺死させられるのだという。マミワタは、肌が白く、黒い長髪の女性であるとされている。

ブッシュは、野性の動物や、魔物 (*ginaji*) のすむところであり、男たちは、つねに弓矢ややり、すくなくともナイフはたずさえていくべきところとされている。

たまたま、ブッシュや畑で産気づいて生まれた子供は、イスラム名のほかに、ニャーホイ (*nyàhói*)、マーホイ (*màhói*) などのニックネーム (*ring sálgá*) がつけられ、大人になってもしばしばその名でいいならわされる。

割礼にさいして、ブッシュにながくとどまり、ブッシュをあるきまわるのも、少年たちに、勇気 (*sínà yár*, 字義とおりに赤い目をもつ意) というものをおしえるためであるという。それまで、母のもとで村をはなれたことのない少年たちを、ブッシュにすむフェンバカ (*fè mbáká*) という巨大な動物をみにいこうといってきそいだし、割礼をおこなったのち、男子としてのいろいろの心得、男らしさ、性のいとなみ、礼

34) 極端な例として、ある死期のせまった重病人が、ガウンデレから村へはこばれていたが、途中で息をひきとると、すぐに、そのそばの村の墓地に埋葬された。

儀といったものをおしえるのである。若者が、草の衣をまとい、草あみの仮面をかぶり、盾とやりをもって、子供たちのまえに現われ (*gékè* とよばれる)、おどし、勇気というものをおしえるのもそのひとつの欠かせぬやり方である。そして、この修業中に口うつしでならう唄のなかには、ブッシュのなかの怪物や魔物をうたったものがある³⁵⁾。そして、一緒に割礼をおこなった仲間は、勇気をわかちもった友人 (*wàì*) として、いつまでも仲間意識をもちつづける。

割礼がおわると、もう母親とははなれた一個の男性として、ブッシュのこわさにも耐えた勇気をもった男性として、ほこりをもってふるまうのである。

他方、女性は、メンス (*gòì*) にさいしては、数日間、自分のいえにとじこもって、村からでて、ブッシュへいくことは禁じられる。けがれということもあろうが、女性はこの時期は、魔物にたいして無防備なのだという意識も同時にみられるのである。

4. ハングブーム村の空間配置

1) 村全体の配置

ブームの村は基本的に集村、ないし塊村といえるものである。畑のとおい村人が農繁期の一定期間出づくりごや (*kùmbì*) にすすほかは、人々はみな、村内にかたまって居住している。バングブーム村は、図14に示されるように、乾線道路にそったやしき (*kirà*) のつらなりであり、中央にベラカのやしき (*kirà*)、モスク (*râu à dîngà*)、井戸 (*gùgà*)、広場 (*njàksùì*)、その周辺に重臣たち (*gáng njùkri*) のやしき (*kirà*)、その外がわに一般の村人たちのやしき (*kirà*)、そして、西の村の出口ちかくに定期市のひらかれる広場と公立小学校がある³⁶⁾。

やしき (*kirà*) は、草べい (*kirà*) によってかこまれ、なかに3~10戸の土かべ、草ないしトタンのやねの家屋 (*pàk*) がたてられている空間である。この草べいでかこまれたやしきも、草べいとと同じくキラ (*kirà*) とよばれる³⁷⁾。それぞれのキラは、入口のいえバックフィル (*pàkfil*)、あるいは、草べいの切れ目によって、道路に入口をひらいている。

やしきの総数は、調査時点で48、そのうち、バックフィルをもつもの18 (37.5%)、もたないもの30 (62.5%) である。カイガマのやしきは三人の兄弟が一つのキラに同

35) ブームの割礼のうたについては、[EGUCHI 1976: 334-343] を参照。

36) その外がわに、1984年にディスペンサリィ、1985年に独立の農業指導所が建設された。それまでは、農業指導員は、村人のやしきに寄寓していた。

37) キラ (*kirà*) は、本来、動詞キル (*kir*, とりかこむの意) からきているとみられる。

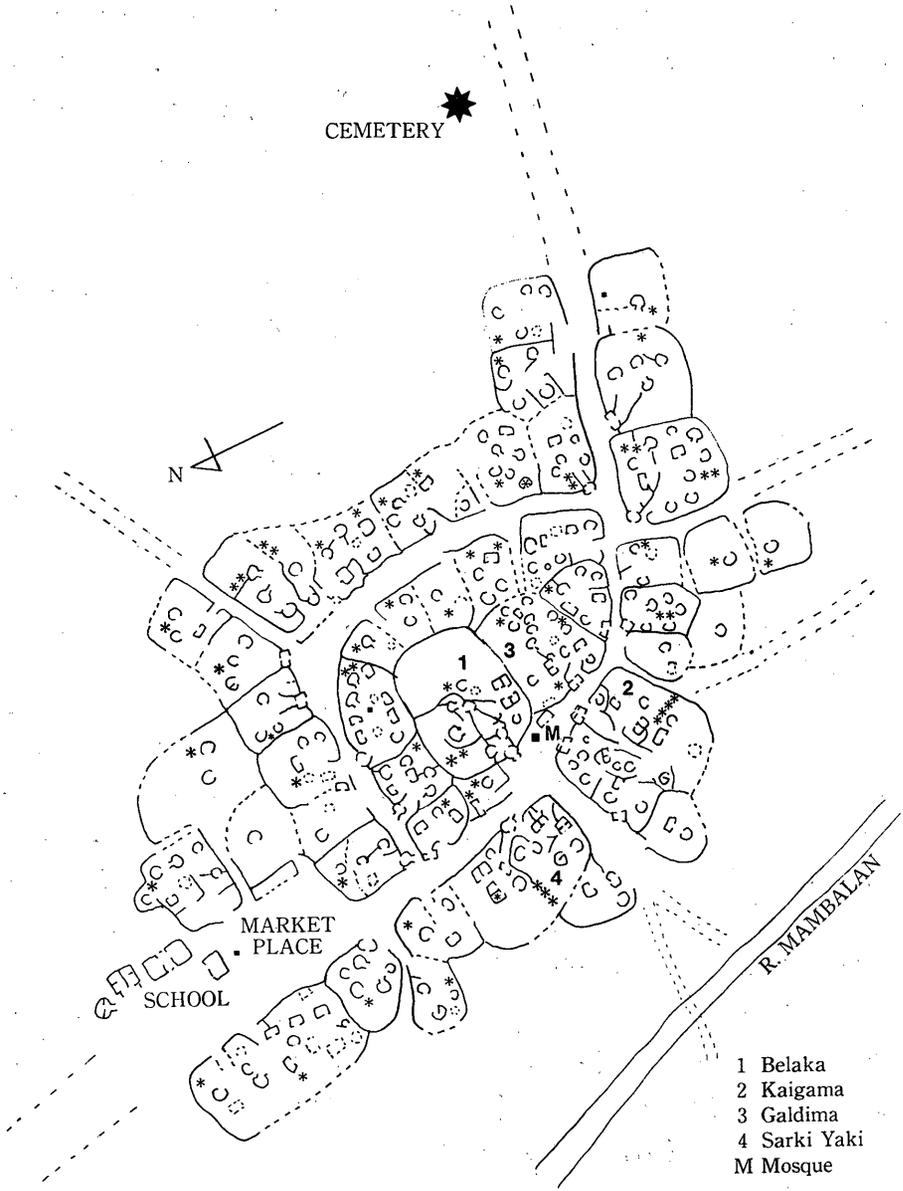


図14 バングブーム村の空間構造 (1971.10)

居して、別方向にひらいた三つのパックフィルをもっている。村人のあいだでは、キラをもつ以上、パックフィルをもつことがのぞましいとされている。パックフィルをもたないものは、それを貧乏、人手不足、入村以来日があさい、などのせいになっている。

2) 民族分布

バングブームの総人口433人は、第3表のように、ブーム、ドゥル、フルベ、ハウサの四つのグループから成る。ベラカの話によれば、1933年ころ、ベラカがこの地に村を開設したときは、すでに数家族のドゥルをふくんでいたという。ベラカからの聞き書きによれば、1950年ころの村では、ドゥルのキラが10であったという。その配置をみると(図15)、のちに重臣ガルディマとなる当時のサルキファダ(Sarkifada)が、当時の重臣カイガマ・ガンガフゥ(Kaigama Gángafû)のやしきの一隅に同居したほかは、ドゥルの全員が、村の外辺部にキラをもっている。この傾向は、現在のキラ配置(図16)においても基本的にはかわっていない。ガルディマが、カイガマの死後そのキラをつぎ、いくつかの死絶、ないし村外へ移住したブームのキラのあとにドゥルが入居した例をみることができる。

また、フルベの二家族は、その一人マールム・ジジ(Maalum Djidji)が、1955年ころ、ベラカの懇請によってイスラム教師として、この村にすみついたのと、村のブ

表3 バングブーム村の人口(民族別)

	男	女	計	
ブーム	97	94	191	44.1%
ドゥル	97	135	232	53.6%
フルベ	4	5	9	2.3%
ハウサ	1	0	1	—
計	199	234	433	

(1970.1 現在)

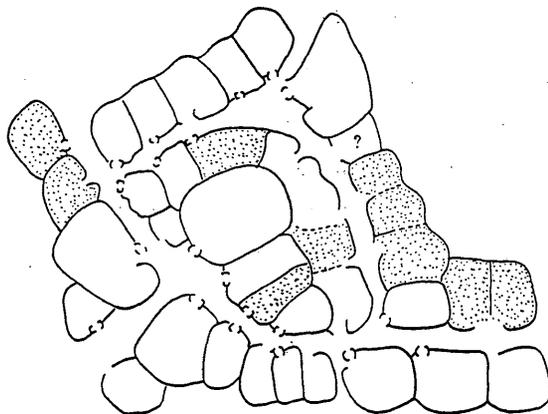


図15 1950年ごろのキラの部族別構成
ききがきによるため、キラの空間配置のこまかい点は正確ではない

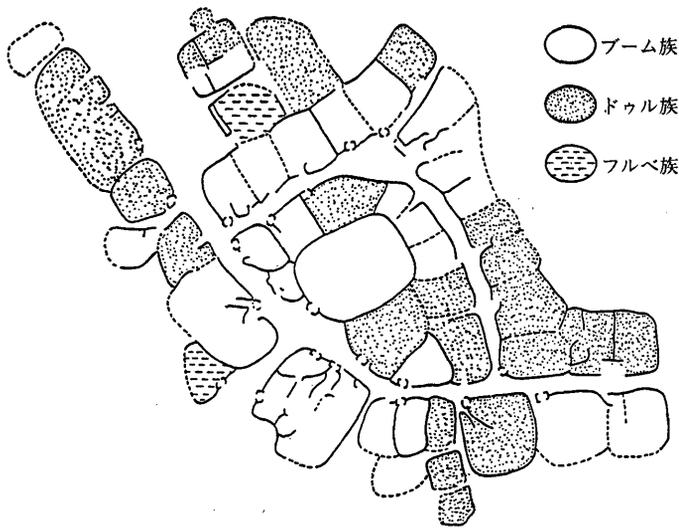


図16 キラの部族別構成 (1972年現在)

ームのアダム・ガルディマ (Adam Galdima, 1955年ころ死亡) の娘の一人と結婚したマールム・ハマダマ (Maalum Hamadama) が同じくこの村に居をさだめたものである。ハウサは、旅の商人であったサリウ (Saliu) が、1965年ころから、ブームのサルキ・ヤラ・ニャーボン (Sarki Yarra Nyáàbòn) のキラに寄宿しているものである。フルベの二人のマールムは、つねにベラカの客人としてこの村にすみついており、客人のもてなしをそのしごとの一つにしているサルキ・ヤキが、その世話を担当している。

3) 村の社会組織からみた配置

かつて、別の論文 [日野 1974] にしめたように、バングブーム村では、ベラカが任命、かつ称号をあたえた何人かの長老が、三人の重臣、カイガマ、ガルディマ、サルキ・ヤキを中心に、一定の住民組織の長となっている。これらの長老たちは、ドック・フー (*ndòk fú*, *ndòk* はうで, *fú* は村, すなわち“村のうで”の意味) とよばれ、同時にドック・フーは、この長老によって代表される何人かの成年男子のグループをさしている。

ドック・フーにはふたつのレベルがある。その一つは、この長老たちによってひきいられるドック・フーであり、もう一つは、このドック・フーをいくつかまとめて組織されたドック・フーである。重臣ガルディマが、筆者に説明するために、この前者を小さいドック・フー (*ndòk fú njiki*, 小さい *ndòk fú*), 後者を大きいドック・フー

(*ndòk fù hânàke*, 大きい *ndòk fù*) とよんで区別したが, 小さいドック・フーがブームの伝統的な父系小リネジ集団に則してのドック・フーであるのに対して, 大きいドックフーは人口減少によって小さなドック・フーが集団としての意味をうしなったときに, ベラカの智慧によって再編されたあたらしいドック・フーであるということが出来る。バングブーム村全体で, 現在16人の小さいドック・フーをあげることが出来るが, その構成メンバーは, 平均6.75人, 村外居住者をのぞくと平均5.1人になってしまう。それが再編によって4つのドック・フーとなって, 一つの構成メンバーが平均27人(村外居住者をのぞくと20.5人)となったのである。

4つの大きいドック・フー, すなわちドック・フー・カイガマ, ドック・フー・ガルディマ, ドック・フー・サルキ・ヤキ, ドック・フー・ニャーグガは, 現在,

- ドック・フー・カイガマ
- ドック・フー・ガルディマ
- ドック・フー・サルキ・ヤキ——ドック・フー・ニャーグガ

というように, ドック・フー・ニャーグガはドック・フー・サルキ・ヤキのもとに統合されている。これはニャーグガが能力, 飲酒癖などによって, ベラカの信頼をうしない, 重臣としての地位をはずされたためである。

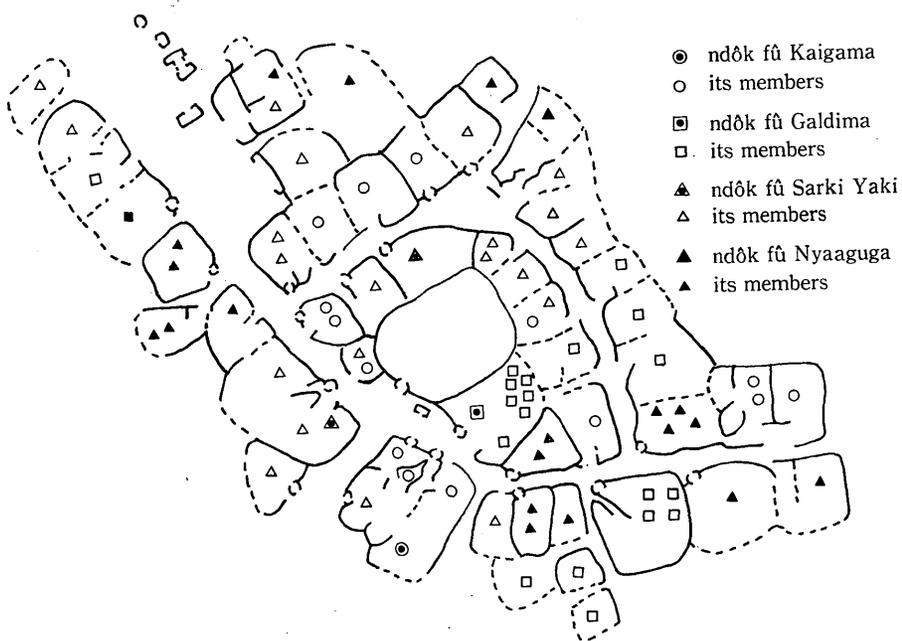


図17 ドック・フーの空間配置

さて、村の空間配置からみると、これらのドック・フーは、地縁的まとまりをなしてはいない(図17)。これは、先代のベラカ・バルソラのマワルワリ (Mawalwali) 時代から、ドック・フーは本来は親族を基礎にした組織であって、近隣集団ではなかったのである³⁸⁾。

しかし、三人のドック・フーは、あきらかにベラカのキラの近く、すなわち、村の中央部に位置している。そして、客人マールム・ジジは、かれの世話を担当するサルキ・ヤキのキラの一部にキラを建設している³⁹⁾。

村でベラカを中心にした村人のあつまりは、基本的には三つある。第一は、三人の重臣大きいドック・フーすなわち、カイガマ、ガルディマ、サルキヤキによるもので、これはほとんど毎朝、ベラカのキラでひらかれる。三人から、昨日来おこったさまざまのできごとについての報告と、ベラカの指示がおこなわれる。村人の死、誕生、事故などが生じたときは、いつも、すぐにこの三人がベラカのキラへ急行して報告する。第二は、16人の小さいドック・フーがあつまる長老会議で、これは月に数回、必要におおじて招集される。第三は、村の成人男子全員があつまるもので、年に数回、これも必要におおじておこなわれる。第一、第二のあつまりは、ベラカの三つあるバックフィル (*pàkfil*) のもっとも外がわのバックフィル・カラ (*pàkfil kàlá*) でおこなわれる。会議以外でも、村人がベラカに会わねばならない事態が生じたり、ベラカがよびつけたばあいは、三人の重臣も列席して、やはりベラカのバックフィル・カラで会合がもたれる。

このバックフィル・カラでは、村人のすべてのすわる場所がきまっている。その場所は、ジャルカバ (*jàlkábà*) とよばれ、たとえば、カイガマのすわる場所はジャルカバ・カイガマとよばれる。図18にみるように、まず、ベラカの場所は、一番奥の右がわ、その前にガルディマ、左がわにカイガマとサルキ・ヤキ、右がわが長老たちの、右手前が一般の村人(男子)、若者や女性がすわるのは、外のダンキ (*dànki*) とよばれる場所である。左手前はジャルカバ・ゴル (*jàlkábà gòr*) とよばれ、客人の場所である。たとえば、村の客人あつかいであるマールム・ジジや、村外からの人々もこゝにすわる。近隣の村の村長や、高名のイスラム教師、あるいは郡庁の使者などは、二番目の入口のいえ (*pàkfil làùsèlè*, *làùsèlè* は中間の、境界の、の意味) に招じられ、こゝの客人の場所に案内される。こゝは白砂がしかれ、そこにゴザをおいてすわる。

38) バングブーム村の若いインフォマントは、説明のために、筆者にドックフウ (*ndòk fù*) を、フランス語のカルティエ (*quartier*) に訳してみせたが、これはただしくない。

39) 1982年、マールム・ジジ (Maalum Djidji) とその夫人が相ついで死亡すると、まもなくこのキラはとりこわされ、サルキ・ヤキのトウモロコシ畑となった。

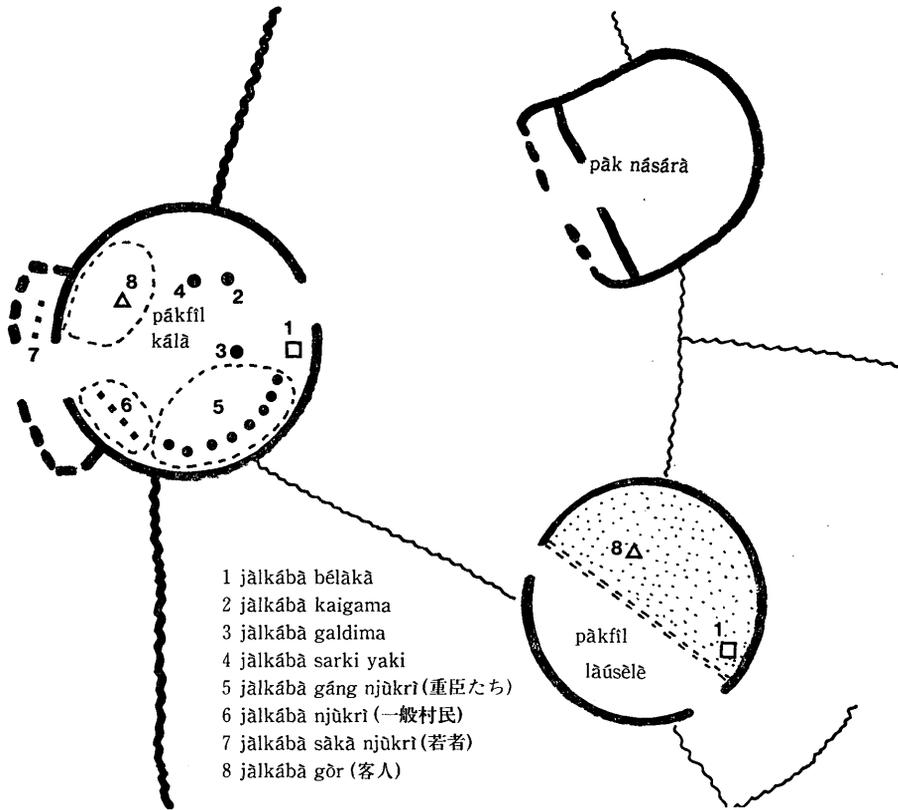


図18 ベラカのバックフィルにおける村人の座所

ベラカは、いずれの場合も木の専用のイスをもちい、ほかの人は土間にすわりこむ。

この村人たちの地位におおじてきめられたジャルカバは厳密にまもられる。たとえば、ある一般の村人がベラカにあうときには、かならず、右の手前にすわり、ベラカと二人きりでも、それ以上近づくことはない。

ちなみに、村人は、こゝにはいるときは、かならず、外ではきものをぬいではだしになる。ベラカの顔を見つめることは、目がつぶれると信じられていて、けっしてベラカの顔の正面に自分の顔をむけない。そして、自分の方からはなしかけることもしない。ベラカの問いにこたえ、あるいは発言をうながされて、人々はうずくまって、あたかも独り言をいうように、顔をそむけ、あらぬ方角にむかってボソボソとはなす。大声をだすことはけっしてない。ベラカが、キラをでて村内にあらわれると、人々はいっせいにはきものをとり、地面にうずくまる。川で洗いのをしているときなどは、衣服のぬれるのもかまわず、その場にうずくまる。

村人をめぐる裁判 (*kiià*) は、村人全員をあつめておこなわれる。警察長官ともいえるサルキ・ヤラ (*Sarki Yarra*) が革の鞭をもってベラカのまえにすわりこみ、ドック・フーがならび、マールム・ジジが列席する。被告、原告がいつれも後見人をともなつて両がわにすわり、ベラカの問いかけにこたえる形で、たがいに自己主張をおこなう。必要があれば、証人 (*Sèdòòwò*) もよばれる。そして、ベラカ、三人の重臣、マールム・ジジが非公開で事件を審理し、翌日村人全員のまえで判決がいわたされる。判決には村からの追放、謹慎、ベラカのキラでの軽労働などがある。

中央の広場にたてられているモスク (*ràù à dinga*)、そのそばにある共同の井戸 (*gùgà*)⁴⁰⁾ の管理は、基本的にガルディマのしごとである⁴¹⁾。井戸の水をくみあげる、長い縄のついたつるべ桶 (プラスチック製、これも *gùgà* とよばれる) は、ベラカのキラに一つ、ガルディマのキラに一つおかれていて、それを借りださないと、人々は井戸を利用できない。この井戸の管理のしごとは、ブームの伝統的な重要役職の一つであり、ニャーグガ (*Nyààgùgà*, *nyáà* はブーム男子の敬称, *gàgù* はつるべ) の担当であったとみられる。ニャーグガのキラには、すでに干あがって使用されなくなった大きな井戸のあとがある。

カイガマ、ガルディマ、サルキ・ヤキの三人のドック・フーには、あきらかに、役職の分担がある。まずカイガマは、村内の人々の組織化にかかわるしごと、いわば内務大臣の役、すなわち、共同作業のさいの人々の組織、集税の督促、学校へやっこない子供の親たちへの督励、村の会合の通知などのしごとをおこなう。ガルディマは、村内の金銭、物品の出入りにかかわるしごと、いわば大蔵大臣のしごと、すなわち、集められた税金の計算、モスクなどの公共施設の金銭や物品の出入りの管理、公共資材の管理、モスク建設の技術者など村でやとい入れた人々の賃銀の支払いなどをおこなう。サルキ・ヤキは、村の外との対応、いわば外務大臣の役、すなわち、客人への応接、村の代表として各種会議への出席、公共道路の管理⁴²⁾、公立学校との対応などを担当する。そのほかの、長老 (つまり *ndòk fù njiki*) には、個々に特定の役職がもたらされているわけではない。

40) ブーム語には、サンビー *sáng mbii*, *sáng* は穴, *mbii* は水) という井戸をさすことばがある。グガ (*gùgà*) はハウサのつるべのばけつからきた外来語である。

41) この井戸は、1950年代後半、フランス植民地政府の援助で掘られたものという。深さ約15メートル (水面まで)、乾季にも涸れることはない。

42) サルキヤキは、ガウンデレ郡庁から、*Chef de Barrière*, すなわち、雨などで道路がこわれやすくなったときの交通規制をおこなうために公共道路の各処に設けられた関所の管理をおこなう仕事を委託されている。

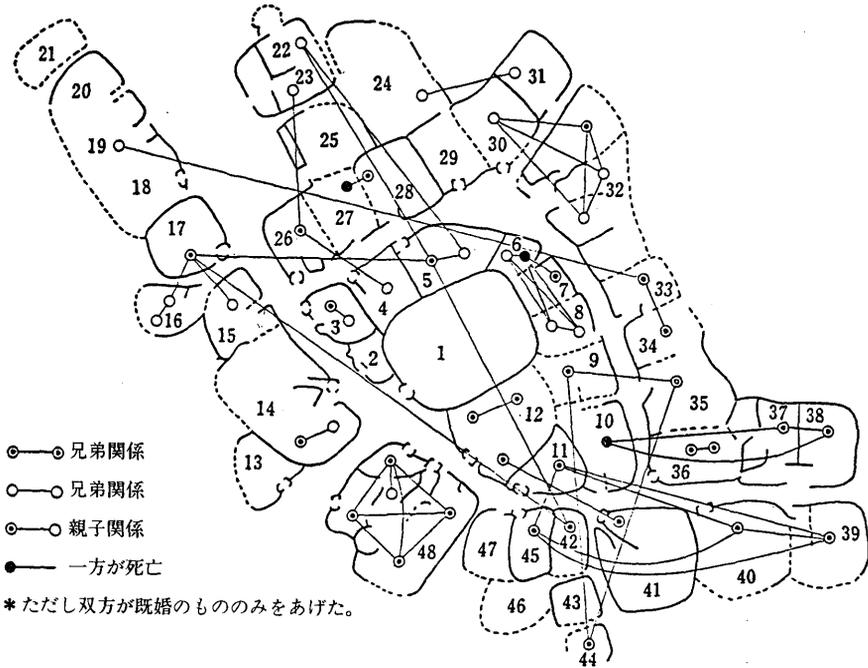


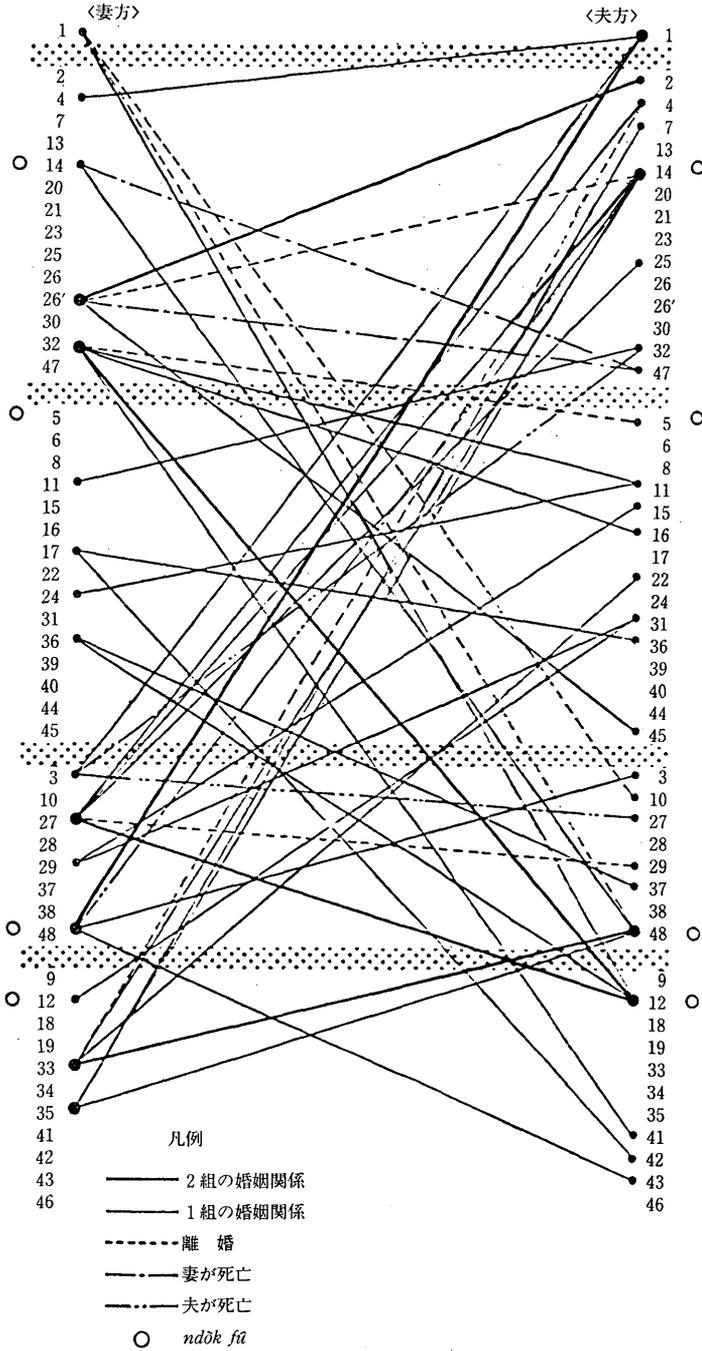
図19 キラ相互間の親子、兄弟関係（親子は父と男子のみ）

4) 親族組織からみた配置

キラ相互間の親子、兄弟関係は図19のようになっている。キラ No. 3, 14, 48 のように親子、兄弟が同一のキラにとどまるもの、No. 6, 7, 8, No. 30, 32, No. 4, 23, 26 のように隣接のキラをもとめて住もうとするもの、No. 5, 15, 16, 17, 22, 42, No. 10, 37, 38, No. 9, 35, 44, No. 11, 39, 40, 45 などのように、遠近にかならずしもこだわらずに、親子、兄弟がどんどんあたらしいスペースをみつけて別居、拡散していくものの三つのタイプがみられる。第一のタイプは、古いブームの人々のキラに、第二のタイプはそれに準ずる。第三の拡散タイプは、ダブル系の比較的あたらしくバングブーム村に來住してきた人々にみとめられる。

一方、婚姻にもとづく姻族関係も、図20にしめされるように、村内で広く交錯している。

村のはしからはしまで300メートル弱、あるいはも数分という密集した集村のなかで、親族、姻族の網の目が縦横にはりめぐらされ、その世代的重積によって、村の社会統合、社会関係に大きな役割をはたしていることはあきらかである。



26'は1971年に男系が絶え kira No4 から一組の夫婦が移りすんだ。

図20 キラ相互の姻族関係

5) モスクをめぐる空間配置

村の中央広場に面するモスクは、ほど西西南に入口がひらけ、背面は東東北のメッカの方向 (alkibilà, 又は *mààtl makkà, máàfil* は大きな道) にむいている。

入口をはいると、せまい中庭があり、さらにその入口をとおると、数十枚のゴザ (*dààgò*) をしきつめたモスクの内部にたつする (図21)。中央正面に、メッカの方向にむけて、イマーム (*limàm* イスラム導師) の場所がある。1日5回のおいのりしてくる人々が礼拝をおこなう場所はかならずしもきまっているわけではない。しかし、一般には、イマームのうしろに、3人のムアッジンのラダン (*làdàn* おいのりの時間をしらせる役), そしてその横に、ベラカや重臣たち, そして長老たち, 一般の村人たちがならぶ。金曜日の集団礼拝のときは村外の人々もおおくあつまり、ベラカのほかの

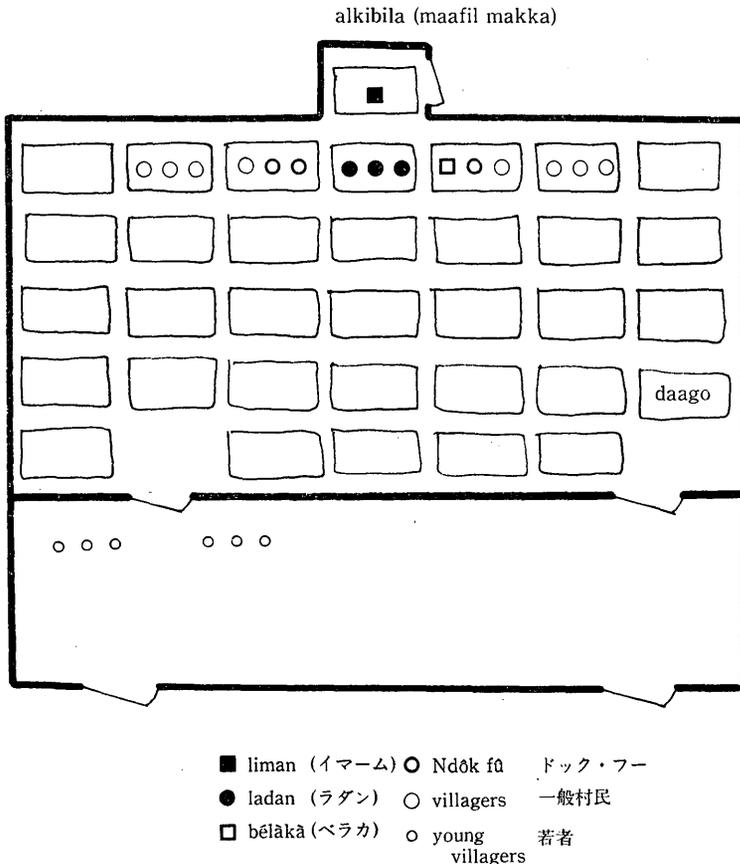


図21. モスク内でのおいのりの座の例

村人は、村外の長老やイスラム教師に前の場所をゆずる。モスクがいっぱいになると、若者や少年は中庭にすわってそこで礼拝をおこなう。イマームにしたがって、ラダンが大声で「アッラーフ・アクバル」(*Allāh·akbar*) ととなえ、人々がそれに声をあわせて礼拝する。モスクのなかでは、基本的にはベラカも一人の平等な信者として、一般の村人とならんで礼拝する。

金曜日の集団礼拝にあつまってきた村外の人々のおおくは、接客役のサルキ・ヤキのバックフィルにすわりこみ、おしゃべりをしながら、午後1時ちかくの礼拝の時間をまつ。サルキ・ヤキは水のはいったやかん (*bùùtá*) を用意して、人々のおきよめウドゥ (*udu*) の便に供する。時間がくると人々はそれぞれにウドゥをすませてモスクへむかうのである。

イスラム暦のラマザン月の27日はライラール (*lailaal*) とよばれ、村の男たちは全員モスクで一夜をすごし、コーラン朗誦をおこなう。一方女たちも別の場所(ベラカのバックフィル・カラ、ガルディマのバックフィルなど年によってことなる)にやはり全員があつまってコーランをよんだり、イスラムのうたをうたって過ごす。

ラマザン月あけのジュルデ・ラマバーナ (*julde ramabaana*)、巡礼月10日のジュルデ・ライハージ (*julde raihaaji*) の日、国の祝祭日などには、村の中央の広場でダンス (*ndàna ndài*) がおこなわれ、太鼓を中心に若者が輪になって、その輪の中でかわりばんにおどりをおどる。

6) 市場をめぐる空間配置

週1回、毎水曜日にひらかれる定期市は、村の中央広場から100メートル余西よりの公設市場の場所 (*bàbàl lúmó*) でおこなわれる⁴³⁾ (図14)。この市場に出店するものは、すべてガウンデレの郡庁 (*sous-prefecture*) できめられた50フランの使用税 (*sèède lúmó*) を支払わねばならない。徴収は、郡庁から委託されたオスマヌ・ニャーヤトが担当し、支払いとともに公給のチケットが手わたされる。オスマヌは月ごとにまとめて郡庁にとどける。

市場全体の配置のなかであきらかなことは、男の場所、女の場所がかなりはっきりと区別されていることである。図22は、1970年2月25日(水)の市場の売り手の配置と商品をしめしている(写真1)。

道路に沿って一方に女の売り手がならび、いろいろの容器にいれたあげドーナツ、

43) 1974年にキラ No. 26 (図19) のニャーヤト (*Nyááyàt*) が死亡したあと、1977年市場用のやねつきの建物は校舎に改築され、市場はすこし東より、とりこわされたニャーヤトのキラのあとにうつされた。オスマヌはこのニャーヤトのむすこにあたる。



写真1 バングブーム村の定期市



写真2 定期市の女性の売り場

の上に古着、小間物をならべた男、テーブルの上に塩や肉をならべた男などの男の売り場である。その中心ちかくには、おもにガウンデレからやってきて雑穀やマニオックなどを買いつける仲買人のコーナーがあるが、こゝは男も女もまじっている。広場の北がわには、日乾しレンガ壁、草やねの細長い建物があり、こゝは男の衣類売りがかたまっている。ガウンデレからきたトラックや乗合バスもこゝにとまっている。

定期市の日はもちろん、中央広場にちかいキラ No. 12, No. 48 などのバックフィルには、しばしば、ミシンをもった仕立やが店びらきしている。またこの付近には、ときどき、村の若者がテーブルをだして、キャンディ、タバコ、マッチなどの小商品

を売っていることがある。またキラ No. 3 や No. 26 のわきの道路沿いには、女たちがつくったあげドーナツ、ショウガ水、石けん、あるいは土器やかごなどがならべられて売られていることがある。おおくは無人で、人々はドーナツをつまめば、きまったお金をその器のすみにそっといれる。信頼の自動販売機とでもいえる商慣習である。

市場の日、ときにはそのほかの日にも、村の特定のキラでは、モロコシビールがかもされ、人々に売られるが、これについては後にのべる。

7) 教育をめぐる空間配置

バングブーム村でおこなわれる教育は、まずは公共教育であり、もう一つは、イスラム教育である。

村の西端の一隅には、1960年代前半に設置された公立学校の校舎と、教師たちの宿舎がある。校舎は、二つの教室を両翼にもったコンクリート壁、トタンやねの校舎と、とみに建増しされた日乾しレンガ壁、草ぶきやねの一教室とからなる。1970年当時、学校は6年制であったが、のちに8年制に拡張された。それ以上はガウンデレかその他の都市に進学しなければならない。1970年には教師は4人で、3人が村はずれの教師の官舎にすみ、1人がキラ No. 17 のビガウラ (Bigaoula) の一隅にすんでいた⁴⁴⁾。2人がキリスト教徒、2人がイスラム教徒であった。学齢(6才)にたった村の子供たちはほぼ全員が就学する⁴⁵⁾。

イスラム教育は、マールム・ジジが主宰するコーラン学校 (jândirdè) でおこなわれる。まい日午後6時～8時(休日は金曜日)、かれのキラのバックフィルか、その外がわの前庭でおこなわれるが、生徒は25人くらい、大体20パーセントていどの参加率である。子供たちは、公立学校がおわるとブッシュにでかけ、それぞれ一束のまきをあつめてきて、そのたき火のあかりで学習をおこなった⁴⁶⁾。

44) 注43に示したように、1977年市場の建物が校舎に改築され、トタンやねの4教室ができた。

45) 1970年ころには教室に余裕があったため、4～5才の学令期以前の子供も初年級に出席し、学令にたつるまで何年もそこにどまっていた。休暇あけ(10月)や、農繁期には出席率がおち、ベラカの命でカイガマが父兄を督励してあるいた。

46) 1977年、マールム・ジジ (Maalum Djidji) が病いと老令でガウンデレにうつりすむと、しばらく、ベラカがイスラム教育を引きうけてきたが、1980-83年、アダマワ県の知事ハマドゥ・マールム (Hamadou Maalum) の好意によって、マールム・ハリル (Maalum Halilou) がガウンデレから派遣され、ガルディマのバックフィルでコーラン学校をひらいた。二年後、これはガルデマにひきつがれ現在にいたっている。

5. キラの空間配置

1) キラの基本的構造

バングブーム村の人びとの住居は、草べい (*kirà*) でかこまれたキラとよばれる空間である。キラは、入口のいえ (*pàkfil*)、もしくは“草べいのきれ目” (*njàk kirà*) によって外の道路にひらけている。なかには、いくつかの家屋 (*pàk*)、家畜小舎やとり小舎、穀物を貯蔵するかご (*fùlnàng*)、果樹や菜園などがある (図23, 図24)。

キラのなかには、ときには、草べいによって、二つないしそれ以上にわけられていることがある。この区切りの草べいはクングキラ (*kungà kirà*)、そしてわけられたそれぞれの部分は、ドックキラ (*ndòk kirà*, *ndòk* は腕、つまり *kirà* の腕を意味する) とよばれる。このばあいは、それぞれのドックキラには、それぞれ、いくつかの家屋、貯蔵かごがあり、それぞれが独立した世帯であることをしめしている。

草べい (*kirà*) には二つの種類がある。一つは、禾本科のアンブクダワ (*àmbùkùdàwà*)、とかアレフェレ (*aléfèlè*) などの太さ数ミリくらいの 固い茎をあんだもので、キラ・カンガケ (*kira kàngàkè*) と呼ばれる。もう一つは、禾本科の *àmbùkùdàwà*, *àgbòyì* などの1~2ミリの茎をならべ、両がわから横木をあて、柱に固定してしぼったもの

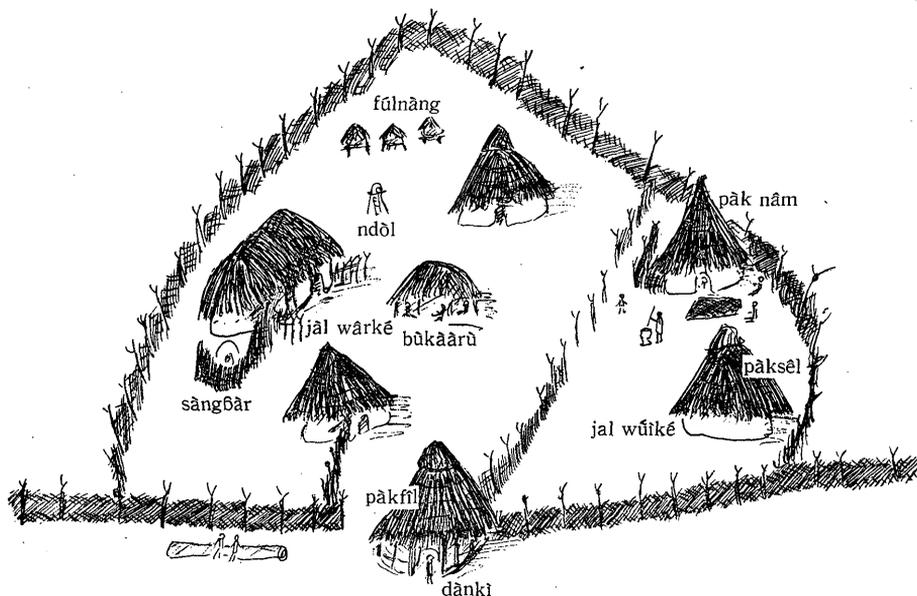
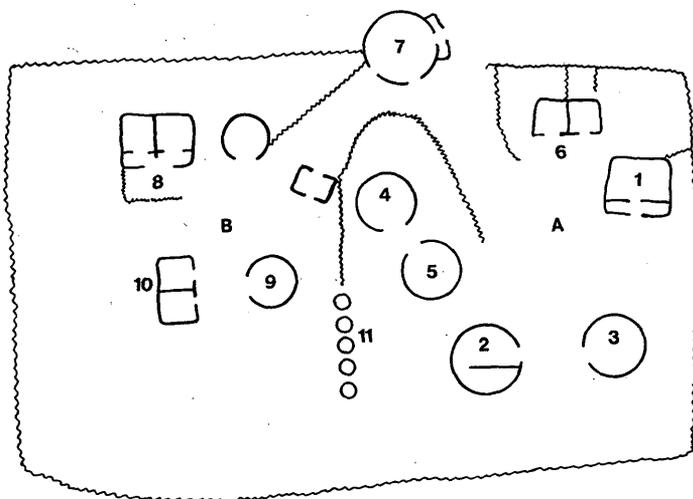


図23 キラの一例



写真3 バックフィルとキラ



- A ndök kírà Sarki Yaki
- B ndök kírà Hamandiko
- 1 pàk nàm Sarki Yaki (sleeping house of sarki Yaki)
- 2 pàk nàm máákírà (sleeping house of his first wife)
- 3 pàk sèl máákírà (kitchen house of his first wife)
- 4 pàk nàm Haoua (sleeping house of his second wife, Haoua)
- 6 pàk sèl Haoua (kitchen house of his second wife, Haoua)
- 7 pàk fíl (entrance house)
- 8 pàk nàm Hamandiko
- 9 pàk nàm Maerema (sleeping house of his wife, Maerema)
- 10 pàk sèl Maerema (kitchen house of his wife, Maerema)
- 11 fúlñàng of Sarki Yaki and Hamandiko

図24 キラの一例 (kírà Sarki Yaki)

で、キラ・ダンパーニ (*kirà dāmpāáni*) によばれる (写真4)。高さとともに、一般の村人のやしきで2メートルほどで、背のびをしてもものぞけない高さである。

キラ・カンガケのつくり方は、地面にまず、3メートルくらいにきりそろえた茎をななめにならべ、その上に、もう一組の茎を60度くらいの角度でななめにかさね、一方を固定して、他方をそのなかに交互にあみこんでいく。ふつうは5段あみにする (図25) (写真5)。あみあがると、上端をなわであんで固定する。へいをたてる所には、数メートルおきにソイサ (*sòisa*) という木をうえて⁴⁷⁾、そこに数十メートルにあみあげたキラ・



写真4 キラ・ダンパーニの建設

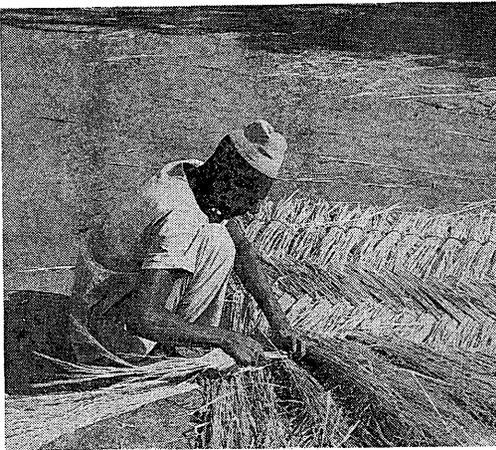


写真5 キラ・カンガケの製作

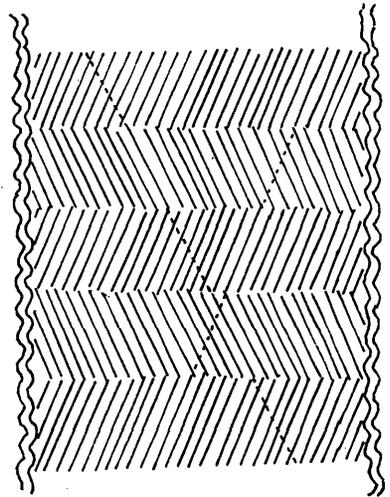


図25 キラ・カンガケ概念図

47) ソイサ (*sòisa*)、ブーム語ではソイ (*sòì*) はへび、サ (*sa*) は枝、枝をきったあとに出てくるあたらしい枝が緑色で、皮が紙状ではげやすく、枝状にのびてへびのようにみえるための名であろう。学名は、*Commiphora kerstingii*. A tree 20-30 ft. high, with smooth green bark eventually peeling in brownish paperly strips; panicles crowded at the ends of the branches which are brownish tomentellous and marked by leaf-scars: often planted. [HUTCHINSON & DALZIEL 1958: vol. I, Part 1, 694].

カンガケをたてかけてなわで固定していく。

キラ・カンガケはつくるのに手間がかかるが、丈夫で数年はもつ。他方のキラ・ダンパーニは、簡単にできるが、ひつじややぎ、子供たちによって容易にこわされる。親しい同士では、しばしば、キラ・ダンパーニはこわれたらそのまま放置され、人々の往来ができるようになる。図14で、破線でしめたキラの境界はそれである。

おもて通りに面したところはキラ・カンガケが、うらがわやとなりとのあいだの境やクンガ・キラにはキラ・ダンパーニがもちいられるのがふつうである。

入口のいえバックフィル (*pàkfil*) は、フィル (*fil*) がとおり道を意味するように、入口が二つ以上あって、なかをとおりぬけることができるようになったいである (図26)。おおくは、入口が二つであるが、村にはいくつか、入口が三つあるバックフィルがあつて、バックフィル・ジャク・モコン (*pàkfil njàk mòkón*, *njàk* は入口, *mòkón* は3) とよばれる。

現在のブームのキラでは、ベラカのキラをのぞけば、バックフィルは一つであるが、もっていないかであるが、伝統的なブームのキラでは、バックフィルが二つあるのがふつうであったという。そして、内がわのバックフィルはバックフィル・ジャクモコンで、一方が兄の、他方が弟のドックキラにひらいていたという (図27)。このばあい、外がわはバックフィル・カラ (*pàkfil kàlà*, *kàlà* は外部の意)、内がわはバックフィル・ビル (*pàkfil bìr*, *bìr* は内部の意) とよばれた。それぞれの兄弟のドックキラでは、男のばしょ (*jàl wàrké* 又は *ndòk kirà wàrké*) と女のばしょ (*jàl wúiké* 又は *ndòk*

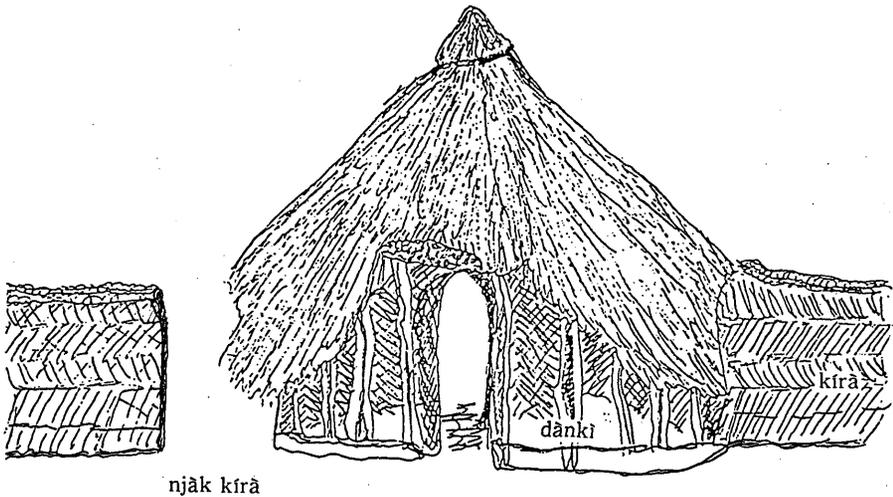
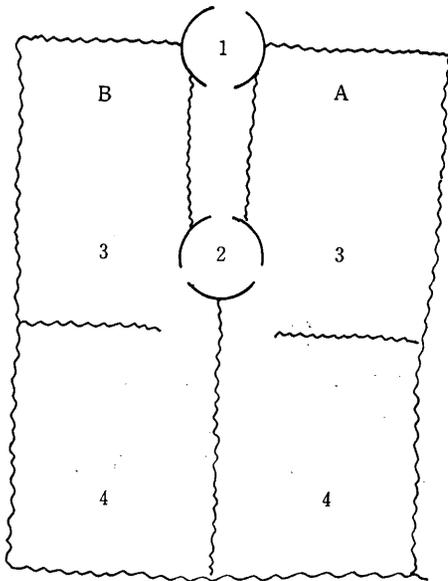


図26 パックフィルの一例



- 1 pàkffl kálá
- 2 pàkffl à ñir
- 3 jàl wàrké (ndòk kírà wàrké)
- 4 jàl wúíké (ndòk kírà wúíké)
- A elder brother's (ndòk kírà A)
- B young brother's (ndòk kírà B)

図27 ブームの伝統的キラ

kírà wúíké) がはっきりとクンガキラで区別されていたといわれる。

現在は、このようなかたちで、男のぼしょと女のぼしょがクンガキラ (*kúngà kírà*) でくぎられてはいないが、人々の観念のなかでは、一つのキラにおいて、外がわのジャル・ワルケ (*jàl wàrké*) と、内がわのジャル・ウイケ (*jàl wúíké*) の区分ははっきりしている。

まず、パックフィルは男の空間である。男の客人はこゝでむかえられ、女の客人はこゝにたちよらずにまっすぐキラの内部へはいつていく。ふつうはパックフィルの横にキラのきれ目があって、客人もふくめて女は、パックフィルをとおらずに、この切れ目をとおって出入りする。ベラカのパックフィル、あるいは伝統的なブームのパックフィルでは、キラの内部にはいるにはどうしてもパックフィルをとおらなければならないが、そのときは、とおる女はその間無言で、わき見をせず、人がいてもあたかもそこに人がいないかのようによそおって足早にとおりぬけるし、パックフィルにすわっている男も、あたかも誰もそこをとおっていないかのようによそおう。たとえ知りあいであっても、こゝで声をかけあったり、あいさつすることはない。会話が必要なきときは、女はパックフィルの外にしゃがみ、なかにいる男というかたちでおこなう。おなじキラのメンバーでも、食事のときは男は全員がパックフィルにあつまっていっしょにとる。夫婦といえども、女がそこに参加することはない。

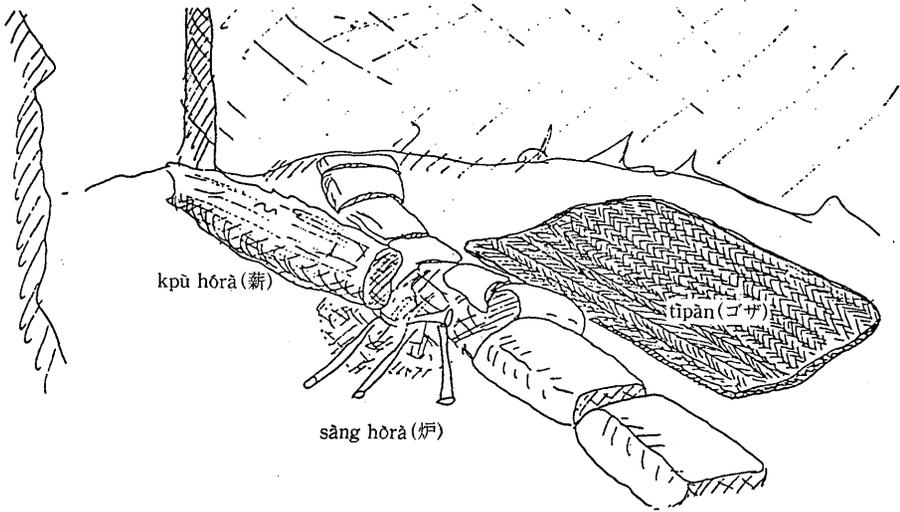


図28 パックフィルの内部

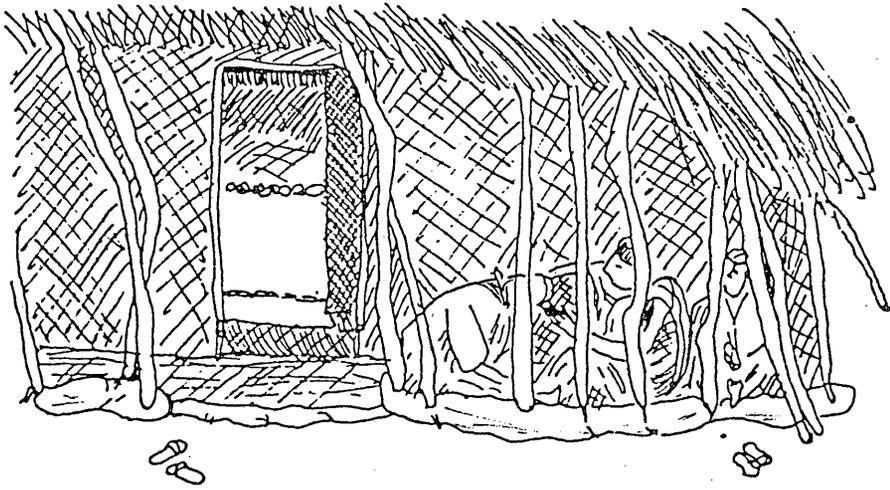


図29 ダンキ

パックフィルの中央には炉がしつらえられ、寒い朝など、太いまきがおかれ、火が入られる(図28)。これは男の炉(*sàng hórà wárké*)とよばれ、女がふれることはない。この火では、ものを煮る(*kàr*)という行為は許されない。肉やトウモロコシを焼く(*súng*)ことはできるし、例外的には、礼拝用のきよめの水をやかんであたためることはできる。朝、礼拝後の男の長老たちが、この炉のまわりにすわりこんで談笑す

ることがおおい。

また、バックフィルの草やねの前方のさしかけの部分は、しばしば支柱によって前にはり出していて、人々がすわる空間になっている(図29)。この空間はダンキ(*danki*)とよばれ、風とおしのよい絶好の日かげを提供し、男たちの談笑のばしょになる。

キラのなかでも、主人のバック・ナム(*pàk nám, nám* はねむる、つまり寝所とするいえ)は、入口の近くにあり、その周辺までは、ジャル・ワルケ(*jal wárké*)とみなされている。いくつかのキラでは、こゝにブカール(*bùkààrù*)とよばれるかべのない草やねのあづまやをつくって、男たちのしごとばや、おしゃべりのばしょにしている(図30)。こゝは、男がいないときに、妻たちがすわりこむこともよくある。しかし、いっしょにすわりこむことはまずない。

また、キラの外、バックフィルの近くに、切りたおしたユーカリや、木製のベンチなどをつかって、男たちが腰かけておしゃべりをしていることもおおい。女たちがそこをとおるかかって、男たちと会話をするのはすくなくないが、女たちはたったまま、あるいは道ばたにしゃがみこみ、男たちといっしょにベンチにすわりこむことはない。

こゝにいくつかあげられたジャル・ワルケでの談笑のばしょは、基本的には、長老



図30 ブカールの一例

や公式の客人はパックフィル、親しい友人や親族はキラ内部のブカールや、主人のパック・ナムの周辺、若者たちはキラの外のベンチと、長幼による一つの序列がある。パックフィルのなかで子供や若者がすわりこんでいると、しばしば年長の者がしかりつけ、退去させることがある。

2) 女のばしょ

キラのなかの奥まったばしょは、ジャル・ウイケとかがえられている。一人の妻は、基本的には、一組のパック・ナムとパック・セル (*pàk sèl*, *sèl* は台所、つまり調理をするいえ) をもっている。結婚にさいして、夫は、その妻にこの一組のいえを用意することが義務づけられているという。二人の妻をもつものは二組の、三人の妻をもつものは三組のこのいえのセットを用意することになる。現実には、二人の妻が一つのパック・セルを共用していることはすくなくないが、一つのパック・ナムの共用はない。この一〜二組のパック・ナムとパック・セルのセットのある周辺はジャル・ウイケである。一つのキラのなかで、主人の第一夫人はマー・キラ (*màà kirà*, *màà* はおかあさん、つまり *kirà* の女主人の意) とよばれ、他の妻たちとあきらかに区別されている。第一夫人になるのは、基本的には年齢によるのではなく、結婚歴がもっとも古いことによる。マー・キラはキラのなかのジャル・ウイケにかかわるすべてのことに主導権をもつ。他の共妻たちにたいして、いろいろ必要な命令をあたえることもある。かつては、他の妻たちと、夫とのさまざまの交渉は、マー・キラをとおしておこなわれていたといわれる。現在では、イスラム法により、すべての妻は平等にあつかわれるということで、夫と複数の妻たちの交渉は、基本的には、機会均等ということになる。夫婦生活は、おおむね、妻が夫のパック・ナムを夜おとずれるというかたちでおこなわれるが、夫が妻のパック・ナムをたずねるということもある。複妻との交渉は、一日おき、数日の交代制というローテーションがふつうであるが、そのおつとめのあいだは、その妻が夫の食事を調理するということがおおい。男の子のばあい、ある程度成長すると、ジャル・ワルケの一隅に独立したパック・ナムをたててもらおうことがおおい。女の子や幼い子供は、それぞれの母のパック・ナムに同居しているのがふつうである。

一人の妻のパック・ナムは、他の妻たちもおかせぬ牙城である。おおくは、丸い土壁、円錐形の草やねのいえで、なかにしきりかべ (*bàbùrù*) がつけられている (図31)。最近では、長方形の土壁、トタンやねのいえもたてられ、しばしば、複妻が一つのやねの下のそれぞれのへやをもつという長屋式のものもみられる。

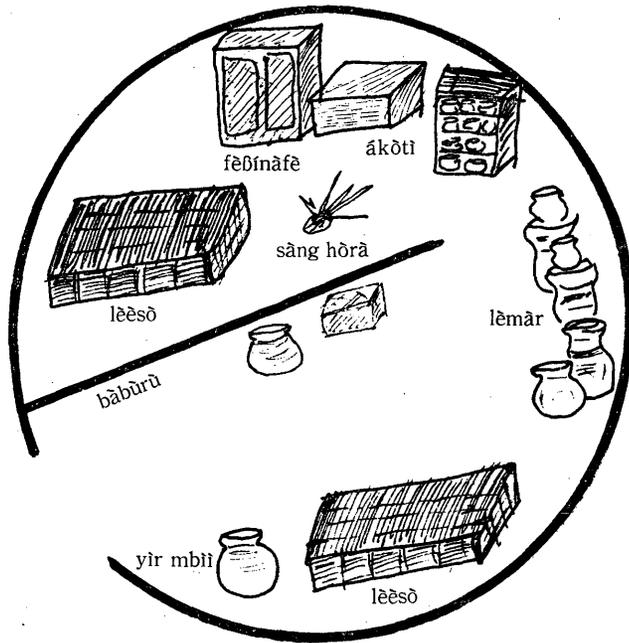


図31 女のパック・ナムの一例



写真6 妻のパック・ナムに置かれたレマル

仕切り壁でへだてられた奥の部分は、妻のねむるばしょで、草あみのベッド (*lèèsò*)、衣裳棚、衣裳ばこなどがおかれ、寒い時期にそなえて炉がしつらえられていることもおおい。仕切り壁がきれた奥の正面には、レマル (*lèmār*) とよばれる、つぼをのせる台がいくつかならべられている (写真6)。これは、ブームの女たちの重要な伝統的

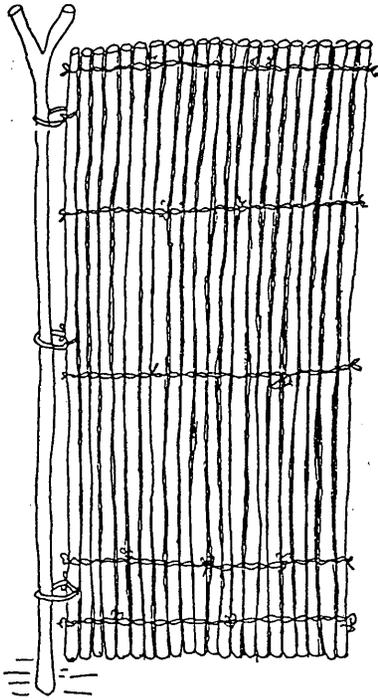


図32 フェトゥナ

しごとであるモロコシビールをかますためのつぼをのせる台である。夫はときにおおじて、このレマルを買って、妻におくる。これはある種の妻の地位のシンボルとみなされている。このレマルの数のおおいほど、夫に大事にされた、安定した妻であるとされる。レマルとやらんで、しばしば、妻が結婚のときもちこんだ、あるいは夫に買ってもらった食器、ホーローびきのかざりなべ (*tàsàò*)、あるいは、くつやサンダル、装身具、ベドゥム (*mbédùm*) とよばれる草あみの皿、フェトゥナ (*fetúnà*) とよばれる草あみの食器おい、その他のものを、かざり棚、あるいは壁にならべている。とくに、結婚後まもない妻のばあい、かならず、このコーナーがもうけられている。これはブームの伝統的慣習ではなく、フルベの慣

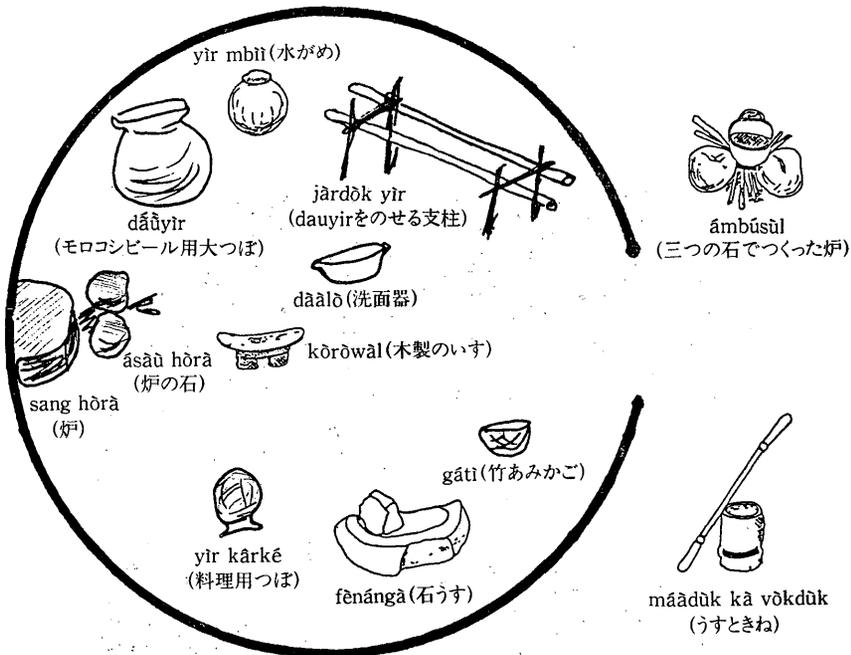


図33 パック・セルの一例

習がとり入れられたものであるとかがえられる。

仕切り壁の外がわ、つまり、入口に近いところには、子供用のベッド (*lèssò*)、飲料水をいれる大きなつぼ (*yir mbii*)、いろいろの雑品を入れるはこなどが雑然とおかれている。

入口には、竹あみのひらき戸フェトゥナ (*fétúnà*) がつけられている (図32)。

パック・ナムとだいたい入口をむかいあわせたかたちでパック・セルがある (図33)。丸い土壁、円錐の草やねがおおいが、パック・ナムよりは小型である。土壁と草やねの間をパック・ナムよりも広くあけてあかりとりにしていることがおおい。入った正面には、15センチくらいの土をかためた高みと、そのまえの二つの石にかこまれた炉 (*sàng hòrà*) がある (写真7)。この炉は、サン・ホラ・ウィケ (*sàng hòrà wúiké*) とよばれ、パックフィルのサン・ホラ・ワルケ (*sàng hòrà wárké*) と対照的に、男は夫といえども手をふれることはない。二つの石と高みとによって、火の上に料理用のつぼイル・カルケ (*yir kárké*) をのせ、煮たきすることができる。サン・ホラ・ワルケでは煮たきをすることができず、サン・ホラ・ウィケにはふれることができないから、女手をうしなったり、妻に拒否されたときには、男たちは煮たきした料理を手に入れることはできない。家計を管理して、妻に必要な食料を手わたすのは日々の夫のしごとであるから、夫から食料をわたされなかった妻はその日は夫に調理する義務からまぬがれる。パック・セルの外の中庭にも、三つの石をおいた炉 (*ámúsùl*) がしつらえられていることがおおい。天気の良い日には、しばしばこゝで煮たきされるが、サン・ホラ・ウィケであることはかわりはない。パック・セルには、飲料水用のつぼ



写真7 女の炉

(*yir mbii*), 穀物を粉にするための石うす (*fènadgà*), 料理用のつぼ (*yir kàrké*) などがおかれている。また、ときには、モロコシビールをしつらえるための大きなつぼ (*däúyir*), そのつぼをのせておく木のさしかけ (*jàrdòk yir*) がおかれている。かつては、レマルをつかったといわれるが、いまはレマルは単なるシンボルであって、パック・セルでのこのさしかけがもちいられている。パック・ナム, パック・セルの周囲は、広い空間になっていることがおおく、まき、臼や杵、また、穀物などを干しておく高い木の台 (*bàngà ásúí*), 鳥小屋 (*ndòl*) などがおかれている。女たちは、この木かけなどをえらんで、ゴザを出してすわりこむ。女の客人もここに案内され、いろいろの仕事をしながら談笑する。しばしば女たちは、ここでは上半身はただで乳房を出したまゝで仕事に精を出す。このような気やすい行動は、ジャル・ウィケのなかでのみ許される。夫や家族の男たちがここに近づくことは少ないが、他の男の客人などが入ってくることはない。何らかの特別な理由で男が入ってきても、男は視線をそちらへは向けず、女たちも男を無視する。

牛脂と灰汁をもちいての粗製の石鹼の製造は、女の現金かせぎの一つであるが、女たちは、ジャル・ウィケの一隅に火をしつらえて、半截にしたドラム罐をつかって、強烈な臭気をまきちらして石鹼づくりをおこなう。これも男が手をふれてはならない仕事である。

モロコシビールづくりは女だけに許された仕事である。かつては、酒の共同作業であるスルガ・イム (*sùrga jim*) のときのみにかもされたモロコシビールは、現在では、現金かせぎのために、市場の日、あるいはそれ以外の日でも、女たちによってつくられ、現金売りされるようになった。いくつかの特定のキラでは、そのジャル・ウィケで、かもされたモロコシビールが、ひょうたんいっぱい (約 300 cc) 10フランで売られる。これは女だけに許された商売で、男は夫といえども現金ばらいで買ったのむのである。さて、このモロコシビールのバーは、ジャル・ウィケでひらかれるのだが、そのときにかぎって、よその男たちが公然と、特定のキラのジャル・ウィケに入ることが許されるというようになる。そして、男も女も客であれば、となりあわせにすわりこんで、ビールをおごりあいおしゃべりをし、ときには楽器がもちこまれ、うたやおどりがとび出すこともある。ちなみに、ブームの伝統的な酒の共同作業において、畑でモロコシビールがふるまわれるときも、男女がとなりあわせでのむことはふつうである。いわば、伝統的なハレの共同作業においては、男女分離の原則はとりはらわれているのであり、モロコシビールのバーは、その延長とみなすことができるのである。

イスラムの論理ではご法度のモロコシビールをめぐる諸習慣が、伝統的なものとして大目にみられ、そのついでに男女がいっしょにすわりこむというご法度も大目にみられたというかんがえも可能である。

3) ベラカのキラ

ベラカのキラの空間配置は、いくつかの点で、一般の村人たちのキラと大きなちがいをみせている⁴⁸⁾。

まず、第一に目をひくのは、草べいの高さ、パックフィルの大きさ、キラ全体の広さなど、キラの規模にかかわるちがいである。

ついで、一般の村人のばあいは一つしかないパックフィルが三つあることである。それは、外から順に、パックフィル・カラ (*pàkfil kàlà*, *kàlà* は外)、パックフィル・

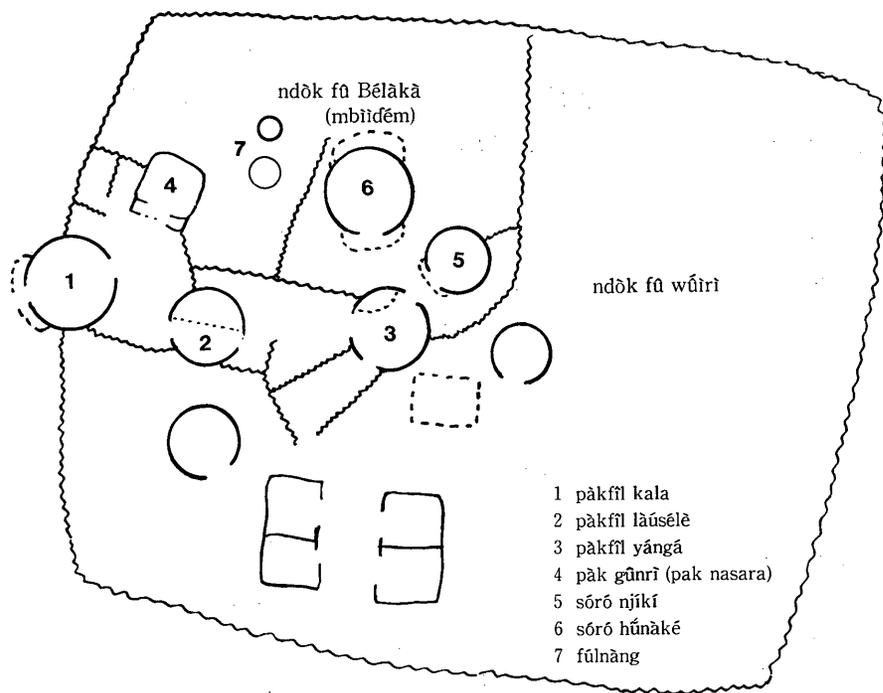


図34 ベラカのキラ

48) 一般には、一つのキラのなかで区分された部分は、ドックキラのよばれるが、ベラカのキラにかぎって、村内の区分と同じくドックフーということばをもちいる。人によっては、ドックキラをもちいることもあるが、ベラカはあきらかに、反覆してこれをドックフーとして表現した。その理由は、ベラカ自身にとってもあきらかにされなかった。

ラウセレ (*pàkfil ráùsèlè*, *ráù* は中心, *sèlè* は境界), パックフィル・ヤンガ (*pàkfil yàngá*, *yàngá* はうま, こゝにベラカのうまがつながれている) とよばれる (図34)。

パックフィル・ヤンガは, 三つの入口のあるパックフィル (*pàkfil nják mókón*) で, これを左にはいとベラカのばしょである。こゝは, 一般にドック・フゥ・ベラカとかビーデム (*mbiùdém*, *mbiù* は水, *dém* はわける, 区分する) とよばれる。こゝは神聖, 不可侵のばしょとされており, ビーデムがしめすように, 不用意にこゝにたちいると, なかからどつと水がわきでて, 入った人を外へおしながすと信じられている。

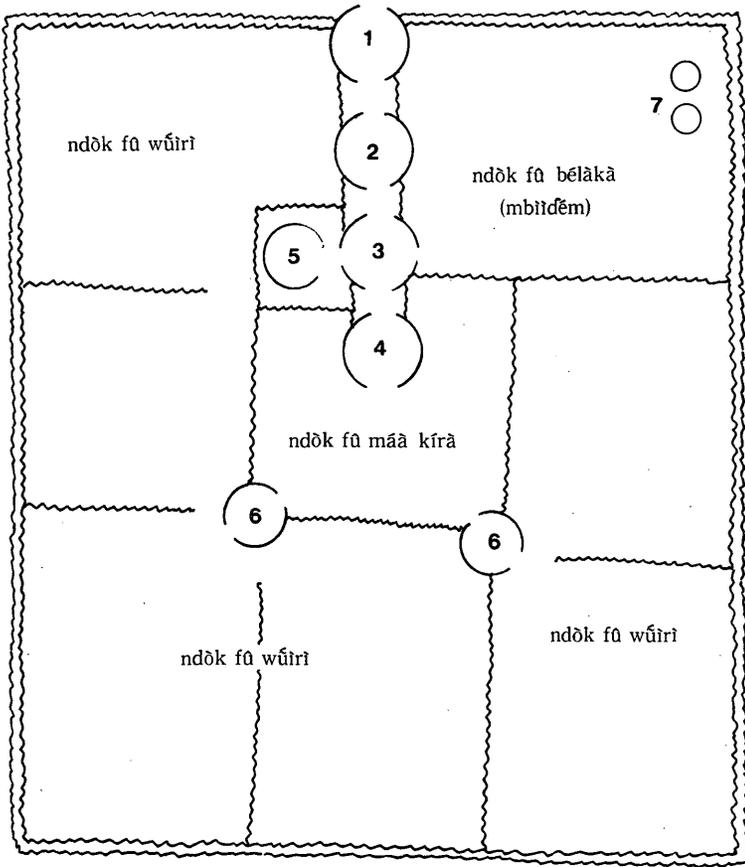
ベラカのいえはソロ・フナケ (*sòrò húnàké*, *húnàké* は大きい), ソロ・ジキ (*sòrò njiki*, *njiki* は小さい) の二つからなる。ソロ・フナケは寝所, ソロ・ジキは居室で, ベラカがコーランをよんだり, 瞑想をするばしょである。ベラカの神聖性の一つのあらわれとして, ベラカは摂食をしないという信仰がある。このことは, ベラカが摂食しているところを人にみせない, したがって, けっして人と会食をしないという秘密性をもたせることになる⁴⁹⁾。妻たちが調理したベラカの食事は, 盆にのせた蓋つきの食器にいれ, カバーをかぶせ, パックフィル・ヤンガのベラカのドック・フーに入る入口のそばにそっとおいて, 妻はそのばしょをはなれる。無人になったところで, ベラカはそれをソロ・ジキにもちこみ, 一人で摂食し, また, おなじようにカバーをかけて, あたかも最初からそこにあったかのように, 入口のもとのばしょにもどす。ベラカがたちさったあとで, 妻はあたかもそれが, そこにずっとありつづけたかのように, それをもちさるのである。

ベラカのドック・フーの奥には, 大きな二つのフルナン (*fùlnàng*, 穀物を入れる草あみのかご) がある。高さ1メートル余の支柱の上におかれたフルナンは, 高さ1.5メートル, 直径が4メートルちかく, 上に大きな円錐形の草のおおいがのせられている。ベラカの畑でとれたモロコシ (*nàng*) がおさめられているが, 昔は, ベラカがガウンデレちかくの山から秘密にとりよせた呪薬をこのモロコシにかけ, 村人はそのモロコシを種に, 畑へ播種したという。ベラカのイスラム改宗後, この慣習はうしなわれたが, こういう形で, 神聖王ベラカは, 民族の豊凶に責任をもったのである⁵⁰⁾。

ベラカの幼時の記憶をたどると, 先々代のベラカ・ゲルンブム (*Bélàkà Ngèrm-bùm*) の時代のベラカのキラは, いまよりももっと大きく, なかに, いえが100もあったという。記憶をたよりに, 当時のベラカのキラを再現してみると, 図35のように

49) 1970年代にはいって, ベラカは毎金曜日, つまりイスラムの祭日に, 三人のめくらのラダン (*làdàn*, ムアッジン) をまねいて, 喜捨 *sàdàkà*) として, いっしょに食事をとるようになった。

50) C. K. ミークは, 凶作がつづいたときにおこなわれたという, ブームの王殺しについてのべている。バングブームのベラカはこの事実を否定している [MEEK 1931: 491-492]。



- | | |
|-------------------------------------|------------------|
| 1 pàkfil kala (pàkfil sáká) | 5 pàk yángá |
| 2 pàkfil läúsélè (pàkfil bùlimbùli) | 6 pàkfil läükirä |
| 3 pàkfil yángá | 7 fùlnàng |
| 4 pàkfil wũiri | |

図35 昔のベラカのキラ概念図

なる。バックフィルが4つあり、3つめを左に入ると、ビーデム、右に入るとうまが飼われている小屋があった。4つめを入ると、マー・キラ、つまり、ベラカの第一夫人のばしょで、マー・キラはその内がわの7つにわかれたベラカの女たちのクンガ・キラ（又は、*tibà kirà*, *tibà* は下部）をとりしきっていた。入口のキラ中央部のクンガ・キラはマー・キラのばしょで、のこりの6つのクンガ・キラは、ドック・フー・ウィリともよばれ、それぞれは、そのドック・フーをとりしきるマー・サンガヨン (*mää sângà yóng*, *sângà* はみる、管理する, *yóng* はひょうたん) に統括されていた。ベラカがその夜どの女をえらぶかは、すべてマー・キラの権限下にあったといわれる。

表4 キラの人口別構成

Jan. 1972 現在

1キラ当りの人口	キラ数	1キラ当りの人口	キラ数
0	1*	12	1
1	3	13	1
2	2	14	3
3	3	15	1
4	2	17	1
5	3	27	1
6	9	31	2
7	7	44	1
8	4		
10	1	総人口 427	1キラ当りの 平均人口 9.08
11	1		

* 無人のキラは平均人口の計算から除外した

あきらかに、ベラカのキラは、神聖王ベラカの聖性が、その空間構造のなかに付与されている。富川が指摘するように「それは聖なる空間であって、ブーム族の首長が聖なる王であるという観念を反映した象徴空間といわなければならない」[富川1971: 278]。

4) キラの構成メンバー

キラの構成メンバーは、表5に示めされるように、夫婦とその未婚の子供からなるもの20(41.7%)、夫婦とその息子夫婦(含未婚の子供、以下同じ)からなるもの3(6.3%)、夫婦とその兄弟夫婦からなるもの1(2.1%)、単身3(6.3%)などのほか、親子、兄弟以外の同居人をふくむもの17(35.4%)となっている⁵¹⁾。

先にものべたように(4-4, 図19)、古いブームの人々のキラでは、親子、兄弟が結婚後も、同一の、もしくは近接のキラにすみ、あたらしいドウルの人々のばあいは、親子、兄弟がどんどんあたらしいスペースをもとめて別居していく傾向がある。

親子、兄弟の夫婦が同居するばあい、おおくは、一つのキラのなかに二つ以上のドック・キラをもうけて、それぞれ独立の世帯をなすというのがふつうである。

一つのキラのなかで、二組以上の家族がドック・キラをなして同居するばあい、しばしば、双方の男たちはいっしょにあつまって食事を共同でとる。そのばあいは、双方の妻たちが順番に役割分担をして食事のしたくをすることがおおいが、いくつかの例では、それぞれが調理した食事を二組もちよって共食することもある。いずれにし

51) バングブーム村のキラの構成メンバーについては、くわしくは、[日野 1974: 17-24] 参照。

表5 キラ 成 員 の 構 成

成 員 構 成	キラ数	%
l	3	6.3
l+op	1	2.1
N	20	41.7
N+op	9	18.8
N+bs	1	2.1
N+bs+op	—	
N+bs+m	1	2.1
N+bs+m+op	1	2.1
N+cN	3	6.3
N+cN+op	1	2.1
N+bN	1	2.1
N+bN+op	4	8.3
N+bN+bs+m	—	
N+bN+bs+m+op	1	2.1
N+3bN+cN	—	
N+3bN+cN+op	1	2.1
Total	48	100.0
うち op を含むもの	(17)	35.4

凡例	N	夫	婦 (含その未婚の子供)
	bN	兄 弟 夫 婦 (//	//)
	CN	子 供 夫 婦 (//	//)
	(3bN)	3組の兄弟夫婦 (//	//)
	bs	未婚の兄弟姉妹	
	m.	寡婦になった母親	
	op.	そのほかの同居人	

でも、それぞれのドック・キラは、基本的には独立した消費共同体とみなすことができる。

一方、こういう同居のばあいは、例外なくそれぞれが個別の畑をもっているし、収穫物も別々に管理される。収穫物、とくに主食であるモロコシ (*nàng*)、干シマニオク (*mbài*) は、フルナン (*fùlnàng*) とよばれる大きな草あみの穀物かごに貯蔵されるが、当然、それぞれの家族は別々にフルナンを所有し、保管している。したがって、フルナンの所有関係をしらべることによって、生産共同体としての世帯の単位をすることができる (表6)。

キラの成員の構成について、いくつかの例をあげよう。まず、キラ No. 48 のばあいである (図36)。このキラの同居人数は31名、その構成は、Ego (E) とその妻子、Eの娘 L の男子 N、E の亡姉 F の子供 P、E の兄 D (盲目) とその妻子、D の男子

表6 キラにおけるフルナンの数

キラ数 \ フルナン数	47	%
0	2	2.1*
1	31	65.9
2	10	21.3
3	1	1.1
4	2	4.3
5	1	2.1
1キラ当り平均	1.45	

* フルナンをもたぬ二つのキラは、ひとつは盲目の老人の1人ぐらして自分の畑をもっていないもの、もうひとつは1971年7月に来住してまだ収穫物をもたないものである。

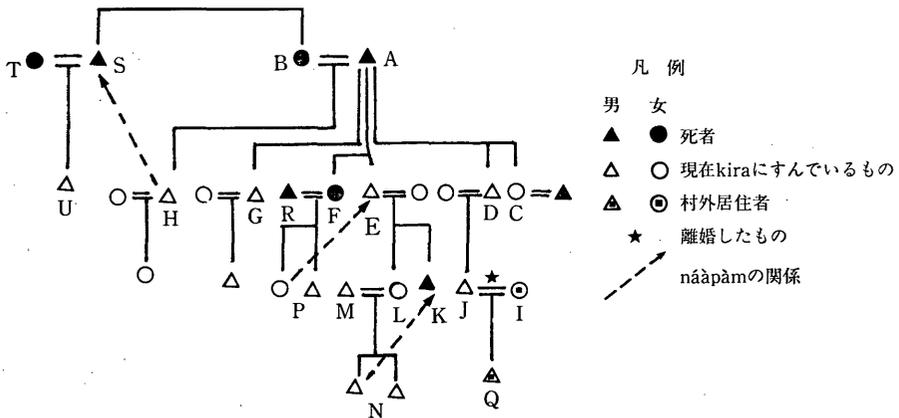


図36 キラ構成の一例 (kirà No. 48)

Jとその妻子、Dの姉で寡婦のC、Eの弟Gとその妻子、Eの弟Hとその妻子、Hの亡母Bの兄S(亡)の男子Uである。これは、まず、Aの男子(異母兄弟)、D、E、G、Hとその妻子がその骨ぐみをなしているが、同時に、N ↔ K → E、P ↔ E、H ↔ S → Uという、三つの「母親の兄弟」の関係がみつめられる。N ↔ K → E αばあいは、Eの娘Lとその夫Mはガウンデレへ転居したが、その8人の子供のうち2人がバングブームにのこっている。Mは、キラNo. 3の長子で、Nはそこにすむこともできる。しかし、Eはこれは自分のしごとだという。それは、若くして死んだ、Eの男子Kが、かれらNのナーパムであるからであるという。P ↔ Eのばあいは、重臣Aが死んだとき、4人の兄弟は、まだ少年ないし幼年であった。そのため、ベラカは、Eの姉Fの夫Rを、Aのタイトル後継者に指名した。そしてR

の死後、盲目の兄 D にかわって、E がタイトルを継承したが、そのさい、P を自分のもとにひきとった。H ↔ S のばあいは、A の複妻の一人 B の兄弟の S は、かつて、キラ No. 26 にすんでいたが、1950年代後半に死亡した。S の兄弟ものこっていたが、E と H は、S の遺児 U をこのキラにひきとったのである。

もう一つ、注目されることは、I, J の離婚をめぐるもんだいである。J はベラカの娘で、I, J のあいだに男子 Q がうまれたあと、二人は離婚した。J はガウンデレで再婚したが、Q は I のところではなく、ベラカのもとで養育されている。これも、P ↔ J の兄弟 → ベラカという、「母の兄弟」原理によっている。

「母方のおじ」すなわち、母の兄弟は、ブーム語でナーパム (*nàà pàm*) とよばれる。ナー (*nàà*) は男子親族をさし、パム (*pàm*) は乳房を意味し、ナーパムは乳でつながった男子親族ということになる。

「母方のおじ」ナーパムは、姉妹の子供にたいして、父について重要な権利、義務をもっている。父系社会であるブームでは、子供は、まず第一に、父の権利のもとにおかれる。しかし、父が死んだり、生活能力、素行、扶養能力、遠隔地居住などの問題があるばあい、その権利は、しばしば、ナーパムにうつされる。

ナーパムは、権利とともに、おおくの義務をもつ。ナーパムは、Ego の結婚にさいしては、父がいなければ、父と同様の、あるいは父の経済力におおじて、婚資金の調達などの義務をもつ。

さらに、ナーパムは、父子のばあいと同様に、あきらかに相務的な義務をもつ。つまり、ナーパムが老齢に達したり、生活能力をうしなつたばあいは、Ego は、ナーパムの子供に準じた義務を遂行する。しばしば、ナーパムの死後、その子供を Ego がひきとる。

父とナーパムのあいだには、あきらかに Ego をめぐって、ある種の緊張関係がある。いっぽんにブーム社会では、父と子のあいだには、かつては忌避関係 (avoidance) であったとみられる、期待される礼儀の関係がみとめられる。他方、ナーパムと Ego のあいだには、かつては冗談関係 (joking) であったとみられる気やすい関係がある。Ego にプライベートな問題がおこったとき、しばしば、父ではなく、まず、ナーパムに相談する。ガウンデレなどへの移住にさいしては、そのおちつき先にナーパムをえらぶ事例もすくなくない。

父と子の関係が、かなりはっきりした依存関係であるのにたいして、ナーパムと Ego の関係は対等の関係である。父 (F) と子 (C)、そしてその父をナーパムとする子 (N) がひとつのキラに同居する事例は10例、全キラの 21.3パーセントになるが、

F と C, F と N のあいだの行動様式はかなりことなる。たとえば, F の妻 W にたいして, C はもちろん, マー (màà, おかあさん) というよびかけをするが, N ははっきりと W の名を呼びすてにする。C が F にたいしておねだりなどの甘えを表現することはよくみられるが, N が F にたいしてはそういうことはない。

さきに例をあげたブームの重臣, キラ No. 48 のばあい, S の遺児 U をひきとったのは, H と S のナーパム関係によるが, S は一般の村人で, その兄弟がいたにもかかわらず, S の死後, U はこのキラにひきとられた。あきらかに, 家格の上のものが, ナーパム原理によって, 子供をひきとるということは, ブームにおけるひとつの慣習である。同様に, D の息子 I が, ベラカの娘 J と離婚したとき, 父権は I にあるにもかかわらず, ためらうことなく, 息子 Q はベラカにひきとられたのである。ナーパム原理の行使には, 経済的理由などよりも, こういうブーム社会における階層性がかかっているとみることができる。

もうひとつの事例を, おなじ重臣キラ No. 12 の例にみてみよう。Ego はドゥルの出身で, ベラカに才能をみこまれて重臣として, この村にむかえられたものである。このキラは, 同居人44人と, バングブームでもっとも大きい (図37)。その構成は, Ego とその妻子, E の母 B の弟 C とその妻子, C の妹の子 N, O と N の妻子, E の異母兄弟 F の男子 J とその妻子, E の異母姉妹 G の男子 K とその妻子, E の異母姉妹 H の男子 L とその妻子, E の異母姉妹 I の娘 M, E の弟 P とその妻子で, C ↔ E, C ↔ N, O, E ↔ K, E ↔ L, E ↔ M と 5 組のナーパム関係がみとめられる。これらのすべての一族は, あきらかに Ego がバングブーム村にすみついてから, Ego の出身地ガンハ (Nganha) 領土内のドゥルの村々から Ego をたよって移住し

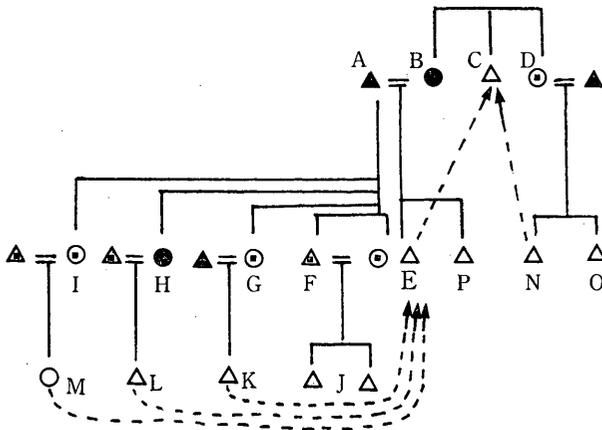


図37 キラの構成一例 (kirà No. 12)

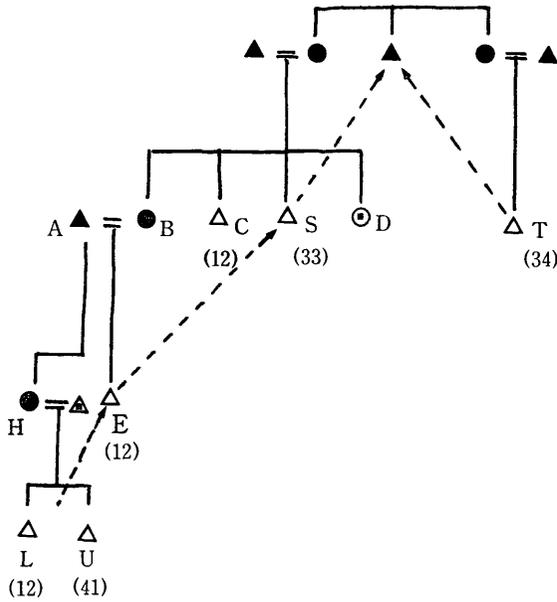


図38 キラ (kírà) No. 12, 33, 34, 41 の関係

てきたものである。くわえて、図38にしめたように、村内のキラ No. 33, 34, 41 も、同様に、かつて、Ego をたよって移住、のちにあたらしいキラを得て定着したものである。かつて、バングブーム村の人口が激減して、ドゥル系住民のうけ入れが必至になったときに、かれらをスムーズにうけ入れるためにブームのナーパム原理が機能したといえることができる。

ナーパム原理でキラにむかえ入れられた成員は、幼時には、そのキラの他の子供たちとおなじいえに同居するという形をとるのがふつうである。そして、成人したときには、おなじキラのなかにドック・キラをもうけて同居する(例 キラ No. 14)、あるいは別にキラを得て独立する(例 キラ No. 41)ということになる。いづれにしても、ナーパム原理でうけ入れられた人々は、村全体で65人、バングブーム全村全人口の15.0パーセントにたつする。ナーパムもふくめて、二等親以内の家族をのぞいた同居人、すなわち、表5で、としめされた人々は、全部で93人、総人口の20パーセント、そのうち、血縁とかかわりない借家人は3人である。ナーパム原理による同居人は、その70パーセントにたつする。その内訳は、表7にしめしてある。

表7 キラの同居人*の続柄別構成

	1	2	10	11	12	14	15	19	27	31	32	33	34	36	41	43	45	48 ^{a****}	48 ^b	合計
姉妹の子			1		(2) 3**	1					(1) 6						(1) 1	2		14(13)
娘の子	3								2									2		7(-)
姉妹の女子の男子													(1) 1							1(4)
祖父の姉妹の男子の男子						(1) 1														1(3)
母の兄弟 (<i>nàà pàm</i>)					(1) 1										(1) 1					2
<i>nàà pàm</i> の子					2										(2) 4			1	1	8
<i>nàà pàm</i> の姉妹の子					(1) 3															3
姉妹, 娘 (寡婦)	1										1	1						1		4
母の妹姉 (寡婦)				1																1
兄弟の子	1				(1) 2			2		2										7
父の兄弟の妻 (寡婦)							1													1
妻の弟																1				1
妻の兄の兄弟の女子の夫		(1) 1																		1
上記の者の配偶者と子供		4		1	19	3					2		4		6			3		39
借家人 (血縁なし)														1				1		3
	4	5	1	2	28	5	1	2	2	2	9	1	5	1	11	1	4	6	1	93

* ここでいう同居人は第5図における op をさす。2等親以内の家族のうち、下記のばあいは op にくわえてある。

(^a) 兄弟がすでに死亡あるいは村外に居住しているばあいの兄弟の子 (^c) 既婚で寡婦となった姉妹およびその子供

(^b) 寡婦となった娘およびその子

** 表中の () は表の実数のうち現在、このキラ内で妻帯しているものの実数である。その家族は、<上記の者の配偶者とその子供>に記表されている。

*** 48^{a,b} は各々 *kirà* No. 48 の *ndòk ktrà* である。

5) キラ内のその他の施設

a. 便所

夫の、および妻の（ときには子供たちの）パックナムの後方には、おおくのばあい、キラ・ダンパーニでかこまれた空間がある。これは便所サン・バル (*sàng bàr, sàng* は穴, *bàr* は便, Fulbe 語で *baawo suudu*, *baawo* は後方, *saudu* は家) である。直径1メートル半、深さ4~6メートルの円形の深いたて穴をほり、上は組み木をして、土をもり、まんやかに15センチほどの円い穴をあける。ときには、上部をコンクリートでかためたところもある(写真8)。古い洗面器やターサオ鍋のふたが、この穴のおおいにつかわれる。大小便は、すべて、このサン・バーか、ブッシュでされる。人々は、やかんやあきかんに入れた水をもっていき、用便のあと水洗いする。便所はできるだけ、清潔にされ、掃除もされるが、ハエ、ゴキブリとの共生はさけられない。

いっぱいになった便所は、こわされ、埋めたてられて、別のばしょにあらたにつくられる。

キラ・ダンパーニでかこまれたこの空間は、同時に、大人たちの水浴びのばしょにもなる。ときには、その一隅に、そのためにコンクリートでかためたり、大きな石をおいたばしょが用意される。人々は、バケツの水をこゝにはこびこみ、水浴びをする。子供はたいていは、村はずれのマンバラン川かマボル川で水浴びをすませる。

b. 家畜小舎

ヒツジやヤギは、組み木で、高さ1.2メートル、直径1.5~2.0メートルのまるい小

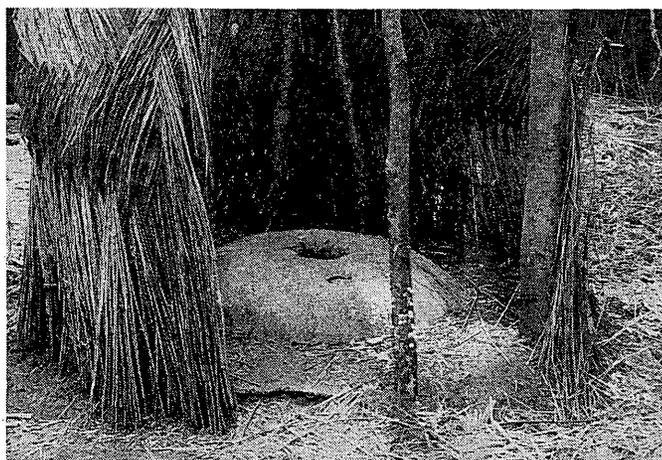


写真8 便所



図39 パック・ア・サマとドル

舎パック・ア・サマ (*pàk à sàmá*, *pàk* は家, *sàmá* はヒツジ) で飼われる。入口は高さ1メートル, 幅50センチくらいの角形で, 木材をしばったふたがされ, 2メートルちかい太い木で固定される (図39)。

ニワトリは, ドル (*ndòl*) とよばれる小さい草あみのもので, ふつうは1.5メートルくらいの支柱の上にしつらえられる。太い木に足場をつけたニワトリ用の階段が用意される。しばしば, 下にヒツジ小舎, どの上にニワトリ小舎というつくり方もされる。図39はその例である。

c. 穀物かご

穀物かごフルナン (*fùlnàng*) は, 草あみで, ふつう, 直径1.5~2.0メートル, 高さは1メートルほどで, 50センチくらいの組み木の上に固定され, いえのやねにた円錐形の草あみのカバー, ソア・フルナン (*sôá fùlnàng*, *sôá* はあたま) が

ふせられる。かごの内部は, 牛糞でぬりかかためられ虫よけになる。組み木の支柱は, もちろん, ネズミの害をさけるためである (図40)。

フルナンは, おおくは, キラの一番おくか, ドック・キラをもつばあい, その境

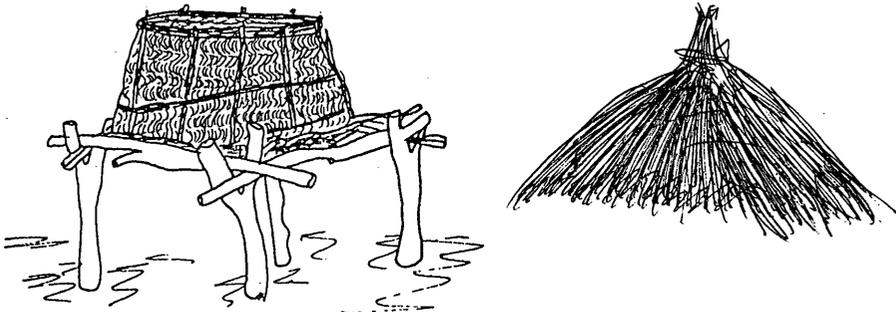


図40 フルナンとソア・フルナン

界ちかくにまとめてつくられる。一世帯は、フルナンを一つか、二つもっている。図14には、フルナン内でのそのばしょがしめされている。

フルナン一つで、おおまかにいえば、3,000～3,500リットル（16～19石）のモロコシが入ることになるが、ふつうは、7～8分目ほどで、一年分の収穫量である。妻の畑でとれたモロコシは、夫のとは別のフルナングに貯蔵されるのがふつうである。それは、もちろん、妻の財産であり、モロコシビールの醸造などにつかわれ、妻の現金収入になることはすでにのべた（5-2）。

6. さ い ご に

以上、ブーム社会における諸事象の空間配置を、バングブーム村における事例調査の民族誌的資料をもちいて、ブーム社会全体、バングブーム村周辺の地域社会、バングブーム村全体、そしてキラとよばれるやしきの順で、できるだけもらさずに記述しようところみた。

そこにおいて得られたいくつかの特徴を総括的にのべてみよう。

まず、住居空間における一般ブーム民と、神聖王 (Divine King) ベラカにおける聖性とのきわだった対比である。それは、イスラム化にともなう平準化によって、いくらかの場面ではうしなわれ、それは近代化（植民地化、国民社会化）におおじてより促進された。しかし、形骸的とはいえ、この対比は、日常の住居生活のなかに明瞭にのこっている。

第二は、居住空間における男のばしょと、女のばしょの区分である。それは、キラのなか、市場、モロコシビール醸造をめぐる場面などにあきらかである。そこにはブーム社会自体の伝統性と、イスラム化による男女区分性とが渾然と融合しあっているとみることができる。しかし、他方、男女が席をならべる就学、女のばしょで他の男をむかえてひらかれるモロコシビールバーの開設など、近代化にともなう変化もみとることができる。

第三は、キラのなかにおける父と子、ナーパムをめぐる共存関係である。そこには、ナーパムをめぐるメンバーのやりとりをつうじて、ブーム社会における階層性、つまり、ベラカ、重臣たち、一般ブーム民、一般ドゥル民というヒエラルキの反映をみることができる。

全体をつうじて、ブーム社会の伝統性は、イスラム化による変化、植民地化、国民社会化による変化と、さまざまな歴史的変容をうけいれつつ、なお、おおくの場面で

脈々と機能しているということができよう。

文 献

- BURNHAM, Philip
1980 *Opportunity and Constraint in a Savanna Society: The Gbaya of Meiganga, Cameroon*. London.
1981 Notes on Gbaya History. In Claude Tardits (ed.), *Contribution de la Recherche Ethnologique a l'Histoire des Civilisations du Cameroun*, CNRS., Paris, pp. 121-130.
- EGUCHI, Paul K.
1976 Mbum Circumcision Songs. 『国立民族学博物館研究報告』1(2): 334-343.
- FARAUT, F.
1981 Les Mboum. In Claude Tardits (ed.), *Contribution de la Recherche Ethnologique a l'Histoire des Civilisation du Cameroun*, CNRS., Paris, pp. 159-170, Vol. I.
- FLØTTUM, Sverre
1974 *Dictionnaire Francaise-Mbum*. Oslo.
Dictionnaire Mbum-Francaise. Oslo.
- FROELICH, C. J.
1954 Ngaoundéré: La Vie economique d'une cite peul. *Etudes Camrounaises* 43-44: 3-66.
1959 Notes sur les Mboum du Nord-Cameroun. *Journal de la Societe des Africanistes* XXIX: 91-117.
- 端 信行
1971 「Duru 族の農村」『民族学研究』35(4): 281~285。
1980 『サバンナの農民』中公新書。
- 日野舜也
1970 「Mboum 族の農村」『民族学研究』35(4): 279-281。
1974 「北カメルーン・Mboum 族村落の社会組織」『アジアアフリカ言語文化研究』7: 1-51。
1980 「アダメワ地域における都市と村落」富川盛道編『アフリカ社会の形成と展開』同朋舎, pp. 87-112。
1984 「西アフリカの村のイスラム: 北カメルーン, バングブーム村から」佐藤次高, 富岡倍雄編『イスラム世界の人びと2. 農民』東洋経済新報社, pp. 185-219。
1987a 「北カメルーンのフルベ都市, ガウンデレにおける部族関係と生業文化——フルベ都市民族誌」和田正平編『アフリカ 民族学的研究』同朋舎, pp. 405-440。
1987b 「歴史のなかのブーム族」川田順造編『民族の世界史12. 黒人アフリカの歴史世界』山川出版社, pp. 274-292。
- HINO, Shu'ya
1978 *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum* (ILCAA. African Languages and Ethnography Vol 10 ed. by Morimichi Tomikawa) ILCAA, Tokyo.
1984 Social Relation between Towns and Villages in Adamawa Regional Society. In Morimichi Tomikawa (ed.), *Sudan Sahel Studies* Vol. I, Tokyo: ILCAA, pp. 169-200.
- HUTCHINSON, J. & J. M. DALZIEL
1958 *Flora of West Tropical Africa*. London.
- LACLOIX, P. F.
1952 Matériaux pour servir l'histoire des peul l'Adamaoua. *Etudes Camerounaises* 37-38: 3-62.
- LAMBEZAT, B.
1962 *Les Population paiennes du Nord Cameroun et de l'Adamaoua*. IAI. Paris.
- MEEK, C. K.
1931 *Tribal Studies in Northern Nigeria*. London.

- 1933 *The Sudanese Kingdom*. London.
- MOHAMMADOU, Eldridge
 1978 *Les Royaumes Foulbé du Plateau de l'Adamaoua au XIX siècle* (ILCAA. African Languages and Ethnography Vol. VIII, ed. by Morimichi Tomikawa) ILCAA. Tokyo.
 1986 *Tradition d'origine des peuples du centre et l'ouest du Cameroun* (ILCAA. African Languages and Ethnography Vol. XX, ed. by Morimichi Tomikawa) ILCAA. Tokyo.
- ONAREST (Section des Etudes Geographiques)
 1975 *Dictionnaire des Villages de l'Adamaoua*. ONAREST. Yaoundé.
- PODLEWSKI, A. M.
 1970 *Un Essai d'observation permanente des faits d'état civil dans l'Adamaoua*. ORATOM. Paris.
 1971 *La dynamique des principales population du Nord-Cameroun*. ORSTOM. Paris.
- SEGNOBOS, Christian
 1982 *Nord Cameroun: Montagnes et hautes terres* (Collection Architectures Traditionnelles). Editions Parenthesis. Roquevaire.
- STRUEMPELL, K. & von BRIESEN (Tr. by Eldridge Mohammadou)
 1980 *Peuples et etats du Foubina et l'Adamaoua (Nord-Cameroun)* ISH. Garoua.
- 富川盛道
 1971 「ブーム族の居住空間：アフリカ学術調査中間報告」『民族学研究』35(4): 276-279。